
モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～

石鍋 盆回し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～

【Zコード】

Z5601C

【作者名】

石鍋 盤回し

【あらすじ】

多田治は、ただおさむ 独りだった。治を支えるのは、意地だった。そんな彼の周りの人間達。そして少しづつ治は変わっていく。

プロローグ

人間の根っこは善から来るのか。悪から来るのか。そんなこと知るか。

少なくとも俺の根幹を作っていたのは憎しみと意地だった。
思い出せない過去という脆い足場に恐怖し、他人を羨望し、必要以上に挫折し、終いには妄執に借られ、すべてを嫌悪し、自分に憎悪を抱き、悲壯に塗れて逃げたくて。でも、意地を張っていた。
確かに、俺にはそれつきりだったと思う。

そういうえばよく、思い返せば小さい頃からなんとかだった、なんていう行を聞いたり読んだりする。

で、もう分かつてることだけど俺自身のことを今振り返ってみるなら、それは中学が始まり、と言つことになる。それも、正直もうあいまいだつたりする。

俺は中学以前のことを記憶していない。

とても痛かつたこととか、衝撃的だったことだけ、無人島のように記憶に浮いている。残りはただそれだけ。何時消えるのかもわからぬ。

いつか、その話を親戚の医者崩れに聞いたら、記憶封鎖だね。と困ったようにいわれた。

まあ、しょうがないよ、とも。

しょうがない。

親戚はおろか近所に住む人間はみんな知ってる事だ。
もちろん、俺も。だからしょうがないなんて嘘を吐く。だから、ずっと思つていた。

たとえば。

手元に五発、実弾が入った拳銃があつて、もしその弾丸分は法に問われないで使うことが出来るという権限を与えられたなら。
四発を使って親父を確実に殺して、残りの一発は自分の口に銛えて確実に脳を打ち抜こうと。

たとえば。

二人の魂を生贊にささげれば、いかなる願いもかなえてくれる悪魔が目の前に現れたなら。

生贊に親父と俺をささげて、残る天然で馬鹿なお袋と、ひとつと家を出た賢い姉貴と、親父に似ていて嫌いな妹が幸せに暮らしていくことを願つだつと。

親父は、生^ハミみたいな野郎だ。

俺が記憶封鎖になつたのは、ガキの頃からの度重なる虐待のせいだ。クソ忌々しくて情けねーことに、P T S D だかなんだかで野郎が拳を上げるだけでこつちは動悸がして眩暈がして体が動かなくなる。指一本も動かせねえで、ただ殴られる。

いつだつたかは、いわゆる屈強な大人だつたけど、毎日浴びるようにな酒を飲んで、毎日タバコを五箱も吸つていたせいで、今となつたら野郎は末期の糖尿病。中学に入つてから力関係は逆転してるつてのに。

こつちがお袋や姉貴がいじめられてるときに間に割つてはいると、それをわかつてるせいか道具を使って動けない俺を殴り伏せた。

話は飛ぶけど、お袋は今で言つ天然だと思う。

ほわほわして、きつとこんな親父に捕まらなきやもつとずつと幸せになれただろ^うとおも^う。勤勉で、家事も仕事も全般にしつかりこなす。元婦警だから正義感も強い。

親父は警察官だ。警察組織の、内面の汚れをぎりぎりまで隠す悪癖のせいで、今でも警察官だ。

何度か、俺がガキのころ殺されそうなほど殴られたことがあつたりして、近所に通報されていた。だから四十五歳の癖にまだ巡査部長。まあいいか。

話を戻して、お袋とは職場で知り合つたらしい。

九つ年の差がある。だからつてわけじゃないけど、二十歳のお袋はまんまと騙された。よく、「もつといろいろな経験をしていればこんな人に引っ掛からなかつたのに。」と、俺がガキの頃から何度もこぼしていた。一度や一度じやないからこれは覚えてる。

二十歳で姉貴を生んだから、やつぱり相当早くに騙されたんだろう。親父が豹変したのは俺が生まれてしばらくしてらしいけど。

姉貴が中学生のときストレス性腸炎で一ヶ月も学校を休んだのと、

鬱病を発症したのはすべて親父の言葉の暴力のせいだ。

実際に拳を上げられるのは俺にで、とばっちりはそれを庇つむ袋だつた。

親父は姉貴にはいつも言葉で追い詰めるような」とばかりいついて。あとあと軍隊ものの映画を観たら、まるであの時の様子をそのまま演じているんじやねーのかつてくらい、心底胸糞が悪くなるくらい、そのままの罵倒が流れていた。ガキの頃からそれを浴びせかけられた姉貴が鬱病になるのも分かる。

自覚してねーけど、ショッちゅう死にたいと思つ、死んでもいいと思う俺も半端に鬱病臭い。

俺が中学三年のときだつたか。確か…冬。ほら、大事なことまでアバウトだ。

そのとき、姉貴が家出した。姉貴は高校三年で、通つていたのはそこそこ有名な進学校だつた。

姉貴は俺が中学で柔道をやつていたのを見て、高校でバスケ部から柔道部に鞍替えしていた。そのときの仲間とか、先生がすげえ良い人たちばかりで、家にいてもそんなときの話をする姉貴を見るとこつちが眩しいくらいだった。

信頼できる仲間を作つて、先生と仲良くなつて、それで家出をした。それつきり、会つてない。

連絡先だけは今でこそ知つてゐるけど、きつと今の俺を見たら、親父の面影を見て取つて苦しむんじやないかつて思う。だからこつちからは会いに行かないし、それにメールも送らない。ああ、お袋なんかは頻繁に連絡取つてるらしい。

俺が三年になると、妹がおなじ中学に入つた。

姉貴から俺が三年、それと俺からは、一年の飛び石で歳が離れてる妹だ。

有理は歳の離れた末っ子。だから親父は一度も妹を殴ることはなかつたし、それに罵声を浴びせることもほとんどなかつた。少なくとも

もお袋や俺に対しても違つて、自分勝手な感情をハッパ当たりする」とは一度もなかつたように思つ。

だから有理のことは、正直大嫌いだつた。

虎の威を借る狐だ。何かあれば甘えた声で親父に泣きついて、その都度俺が意味もなくボコボコにされた。どつちが正しいかなんて関係なかつた。

親父が言いなりなんだから、それこそお袋には我を通しまくりで、学校に送つていけ、遊びに行くから送つていけ、親父が三交代勤務で泊り込みの日には翌日帰つてきて当たり前。姉貴はもういなし、俺はお袋から一銭も金をもらわないうから、しょつちゅう遊ぶ金をせびつていた。

言い草も、いつの間にか親父にそつくりになつていて。だから、俺は有理が大嫌いだつた。

とにかく、その増長の仕方はむかつ腹がたつて仕方がなかつた。だから姉貴と俺はアホかつくくらい仲が良かつたけど、有理とは寧ろ険悪な部分があつた。普通の家族として程度の会話はあつたけれど、どこかぎこちない兄妹だつた。

巧いもんで、有理は俺が三年間やつてきて、姉貴も高校で始めたもんだから、乗つかつておけばなんとかなるだろつてこと以外なんも考えずに柔道部に入つた。俺はもう、珍しく有理の心配をして真剣に止めたけど、聞きやしなかつた。

俺はというと中学の三年の夏休みにやつと九九を覚えるよつな馬鹿ばかりの柔道部にも、柔道にも嫌気がさしていた。てめえら、ヤル氣ぜんぜんねえだろ。つてくらい、道場の裏でタバコ吸つたりして時間を潰す不良のたまり場だつたから。

少しでも親父に見下されたくなくて、俺が不良になることで殴る口実が出来たと増長されるのが嫌でたまらなくて、俺は意地でも不良たちに影響されるのを拒んでいた。

かたくなに、外見と成績は優秀な、優等生に見えるという足場を堅持し続けていた。

だから、尚更柔道部は大嫌いだった。それでも俺一人が俺のために練習してたら、何を間違ったか顧問が俺を副部長に据えちまって、逃げられなくなつた。初段を取つたらとつととこんなとこ辞めようと思つていたのに。

案の定、有理にあんまり良くない人脈が出来たのはこのあたりだ。有理はまったく馬鹿だつたかわりに、世渡りは巧かつたから、連中ともすぐに溶け込んだみたいだつた。

俺は高校じゃ、応用的には帰宅部みたいなとこに入部して校則違反のアルバイトをやつた。いよいよ親父の様子もおかしくなってきたし、一人暮らしするにも金が必要だつた。いつか追い出されるだろうと思っていたし、そうじやなくとも家を出なきゃならないと思つていた。

この頃から、お袋も離婚を仄めかす事を俺に言つよつになつたから、早く肩の荷を下ろさなきやと思っていたのもある。

ただ、俺は姉貴のように素晴らしい人脈も持つていない。そういうのも苦手だつた。

だからひたすらバイトして金をためるしかなかつた。

将来の夢、なんて学校に通つてれば何度も書かされることだけど、そんなのはまつたくなかつた。一度、そんなものは無いつて書いたら大騒ぎになつたから、それからは周りを盗み見て適当に書くよつになつた。

入つた高校は地元のぼちぼちの進学校。普通科。

ここを選んだ理由は地元だから、というだけの理由だつた。

正直、俺は口下手で、しかも口が悪い。どこか人相が悪い。これは忌々しい親父の遺伝だ。

その代わり、お袋の遺伝か、勉強は割りと出来た。普通にやつてれば三百人くらいの生徒の中で三十番台をキープできた。

本気で勉強すれば、電車で一時間も通えば、三つくらい上のレベルの進学校、それか国立に入れたんじやないかと教師にはいわれた。ただ、通いに時間がかかるつて理由で全部蹴つた

何でかつていうと、バイトが出来ない。一人暮らしの準備が出来ないからだ。

ここぞとばかりにもつともらしい説教を、酔つた酒乱の立腹でたれる親父を無視した。

お袋の俺を心配した助言は堪えただれど、

「俺には夢がねえからいいんだ。とにかく独り立ちを早くするからバイトする。夢ってのは昔から何かを積み上げてる人間が言う言葉で、願うことで、俺みたいなヤツが夢を願うのなんざ傲慢だし、なにより俺は昔のこと覚えてねえんだから、昔に描いた夢なんてもんじゃない。今、なりたいものなんて無いんだから、俺の心配をするなら姉貴と有理の心配しどきや良い。俺は何とかなって、そのうちお袋より後に死ぬから。」

と言つたら悲しそうな顔をして、もう何もいわなかつた。

入学式も終わつて一段楽したらとつとどバイトを探し出した。

見つけたのはモムマートのアルバイト。

適当に寂れていて、客の入りもあまりない。有名どころだと下手したらばれてしまうから困るけど、コンビニつてよりスーパーみたいに勝手に店舗改造をしているここには主婦とか老婆しかこない。たまに若い男が来るけれど、そういうのは大概、顔がわれないマイナーなこの店にエロい本を買いにくるだけで、三分もしないで逃げるようになつて帰つていつた。

このコンビニでアルバイトをしている若い面子はたつた四人で、俺と、俺の三つ上の大学生の杉本裕子さんと、他の農業高校に通う、タメの小川耕太と坂江夏彦。後はみんなおばちゃんのパートだ。なんていうか、おばさんとかおっさんと話をしていると別に気にしないけど、潑刺とした同年代と話をしていると、節々に、ああこいつはある程度幸せに育つってきたんだな。俺とは、違うな。と思う癖があつた。

だから余計に口下手になる。そつすると絡みづらいとこつことで敬遠された。もともと親しい友達はあまりいなかつたし……。だから小川も坂江も、しばらくしたらあまり話をしなくなつた。

そんな中で、執拗なまでに俺に絡んできたのが裕子さんだつた。すらりと背が高い女で、肩甲骨にかかるストレートの髪は軽いシャギー。お洒落でお笑い好きで、何よりも変な人だつた。

速射砲みたいに様々な話題を繰り出してきて（特にお笑いが多かつた）適当に相槌を打つともう止まらなくなつた。だから、途中で「ついてけないですから勝手にしゃべつてください。」つていつたからケタケタとさも面白そうに笑つて、またしゃべりだした。

しきりに俺のことを聞いてきたから、適当に嘘を吐くと、そのときばかりはなぜかそれが嘘だつてわかるらしく、口を尖らせた。だから、幽かに残るガキのころの痛かつたこととか、ショックだつたこととかを引っ張り上げて話をした。

幼稚園の頃のこと。卒園式当日に熱出して休んで、何日か後に改めて当日休んだ園児たちを集めて卒園式をやつた日のこと。つくり俺は一人だけ休んだと思つたら、案外その日に休む園児つてのは多いらしくて十人くらいで、当時の俺にはだだつぱりい体育馆で綺麗に整列して証書をもらうのを待つた。なんだか園長が話をしてしばらくまって、名前を呼ばれた。

「多田 治くん。」

台上に上つて、脚を力チ力チに伸ばして証書を受け取つて、深く礼をした。

ゴチンなんてすごい音がして、額に痛みが走つて、顔を上げたら手に持つた証書に血がたれた。

園長と俺の間の台（それも角だ）に、深く礼をしすぎて勢い良く頭をぶつけたらしい。園長は血を見てなにやら騒がしくなつたが、その後ろでは先生方までくすくすと笑い声がした。

それで振り返つたら、血を流してゐのを見たみんなが一転、大騒ぎになつた。

とか。

クリスマスにお持ち帰りのケーキを、毎度毎度大事にそればっかり見ていたら道路脇のどぶに足を突つ込んで潰してしまつて、三年間一度も無事にケーキを持ち帰つたことがない。

とか。

そしたら、裕子さん大喜びして、俺のことをお茶目さんだとか言い

出した。

「十回ほど死んだらどうですか？まあ、話したのは俺なんすけど。」

つていつたら寧ろ大喜び。俺のこと、マイナスイオンを出す「癒し系」だとかいだす始末で、この人はほんとに心底変態だと思う。

それ以来、自分の彼のこととか、学校がどうだとか、それこそ境目がないだらうくらいの勢いで話をしてきた。

俺も、タメの小川と坂江とは大して話をしないのに、なんとなく裕子さんとは馬鹿話をそれとなくするようになった。

しばらくして、ああ、裕子さんは友達なんだ、なんてふと思つた。友達なんて、出来ても酔っ払った親父が俺の電話ひつたくてがなりたてたりするせいで出来やしなくて、だからほんとにいつ以来だろうとか思つた。つても、いつ以来なのかなんてことも、覚えてないから思い出せねえけど。

高校一年になって、一際クソ親父が暴れた日があつた。放射冷却の寒い日だった。鬼殺しつて日本酒を散々飲んで悪酔いした親父が、お袋の髪を引っ張つてまわして、殴つていた。

悲鳴にすぐさま部屋から飛び出して一階に駆け下りた。その光景を見て、思わず、親父に飛び掛つていた。

足を踏みつぶして、横薙ぎに殴り倒したら簡単に親父はすつころんだ。壁に頭を強くぶつけ、呻き、血を流していた。

振り返つてお袋を逃がそうとした瞬間、顔を横からぶん殴られた。勢いあまってぶつ倒れて、振り返つたら部屋の隅に立てかけてあつた釣竿を親父は握り締めてた。

昔とつた杵柄だかなんだか、親父は剣道で全国区の腕を持っていた。それで滅多やたらに俺を殴り伏せ、出て行け、一度と戻つてくるなと言つてきた。

ああ、そうかい。つぶやいた。

ぎりぎりぎしきし身体が痛んだ。その鈍痛に合わせてげらげらと笑つてやつた。

「強がつて笑つてたつて分かつてんだぞ。」

釣竿を握り締めながら、改めてみると本当にやせ細つた親父は叫んだ。

「よお、いつとくけどよ。俺はお前が入院しようが、死のうが、一切これから世話を見えねえからな。」

親父の顔色が、さつと変わつた。俺はげらげらと、笑いが止まらなかつた。自分で、自分が狂つたんじゃないかななんて思つくらい嗤つた。

この言葉は、親父が、病弱で入院を繰り返していた祖母に育ててもらえなくて逆恨みして、やつと退院した祖母に言つた言葉だ。

前、親父の妹の知恵利おばさんに聞いた。

それがどうせに口を突いて出たもんだから、親父は顔を青くしたり赤くしたりおもちゃみたいになつた。

俺は、笑い袋みたいに嗤いながら、ほんと、心底死にてえと思つた。

とるものもとりあえず靴だけ突っかけて、道挟んで五十メートルくらいしか離れてない祖父の家に転がり込んだ。すげえ寒かった。靴下、穿いてなかつたし…薄い寝間着だったから、全身が痛いくらいだつた。

親父だけ家に残して転がり込むこともしようつちゅうだつたから、俺が行つたら簡単に分かつてくれて家に入ってくれた。
しばらく、これこれこういう訳で借りる安アパートを見つけるまではここにおいてもらえないですかと言つたら遠慮するなど、ここにしばらく住めば良いといつてくれた。

でも正直に、すぐに出ますと言つたら、祖母は知り合いのアパートがあるからそこをやすく借りられるように掛け合いますよといつてくれた。

敷金礼金を考えて、生活に必要な最小限の家具家電を計算したら、今までためた金はすぐに足りなくなつた。

モムマートで廃棄になつたおにぎりや弁当をもらえたから食費は浮くとしても、月々の家賃と電気代、ガス代、学校関係を差つぴいたら今までためた分はほとんどなくなつてしまつ計算だつた。

「ほら、ここに住めばいいじゃない。高校を出るまで大変でしょう？」

祖母は優しかつた。祖父は無口な人だつた。ため息をしきりにこぼして自分の息子の馬鹿さを呆れている風だつた。やはりここに住むように、と言つてくれた。

「じゃあ、もう少し金をためてプラスになつたらすぐに引っ越します。」

そういうて、お袋に頼んで荷物一式必要なものを祖父の家に持つてきてもらつた。

親父はと言つと何度もこつちに来たらしいけど、話を聞いていた祖父がすべて門前払いしてくれたらしい。

祖母は居間に布団を敷いてくれた。安心して寝ていいからね。といつた。

でもその晩は、いろいろなところが痛んだのと、お袋と有理をあの家に置き去りにした罪悪感でずっと起きていた。有理は兎も角。きっと、お袋はとばっちり食つ羽田になつてゐるんだろうつて…。

モムマートは朝七時から夜十一時までだつた。最後の一時間は深夜扱いになつて学生にはやらせられないから、と言う理由で店長と奥さんがやつていた。だから実際に仕事をする時間は五時半から十時までの四時間半。

週六日、土日のどつちか九時間を含めても十万にたらない。だから、新しく時給の良いバイトを探した。いくつか当たつてみて深夜はどうやつても無理だと分かつた。普通の店は法律に触れるから深夜には雇つてくれなかつた。わかつてはいたけど。

しうがなないからいくつか探し回つた結果、夜までもつとも時給が高かつたのが牛丼の越野家だつた。

最初研修の一週間は時給七五〇円だつたが、研修があけると時給は八五〇円になつた。つらかつたと言えばつらかつたのは、適当に話をあわせていたもののテレビなどをほとんど見ない生活だつたせいで同年代と話が合わなかつたことだ。まあ、例によつてしまらしくしたら、キャストとはあんまり話をしなくなつた。

それから三ヶ月がたつて、高校三年になつた。

祖父が心配してしきりに俺にたれる説教じみた忠言にも慣れしてきたし、一つのバイトを掛け持ちすることになれて、そろそろ一人暮らしさするのに充分な額が溜まつていた。

祖父は就職した方がいいとか、高卒なら三種の公務員試験を受ける、だとか言つてきた。ただ公務員試験を受けても、何度も酒乱の親父

の騒ぎで警察がうちに来ているんだから一次試験で落とされるのは確実だと思う。そもそも、親父がクビにされていないこと自体が、警察への不信感を募らせる。

そして、何よりも親父と同じにはなりたくないかった。
普段無口の祖父の忠言が多いのは俺のことを心配しているからなのはわかった。でも、俺は意地でも自分で選択肢を選んできた。
そうじゃなかつたら、とうに音を上げているか、気が触れていただろうと思う。だから、毎度の祖父の言葉は右から左へ聞き流していた。

その頃、祖母が激しく体調を崩してしまった。

祖父はもう七十に近い歳だったが、自分の会社を営業していた。昔は蚕で機織をしていた大会社だつたらしいが、最近の企業が中国で安価に服を作り出すようになつたためにめつきり不景気になり、借金があるらしい。そのため今でもいろんなところに駆けずり回つて働いている。隠居なんて言葉を知らないみたいに。

智恵理ちえりおばさんはその会社で働いていて、最近結婚した叔父との間に生まれた幸博ゆきひろを、仕事の間は祖母に預けていた。

幼稚園に預けるまでは祖母が昼間面倒を見ているわけだけれど、夜は夜で待つていなくてもいいって何度も祖母は俺がバイトから帰つてくるまで起きて待つていた。

夜十時にバイトが終わって、えつちら自転車をこいで帰つてきたりもう十一時に近いつていうのに。

だから、もともと身体も丈夫じゃない祖母は無理がたたつてしまつた、といつことらしい。祖父が、どう切り出したらしいのか分からないと言つ口調で俺にそう告げた。

その日は越野家のバイトを休んですぐに病院に走つた。

「心配すること無いんだからね。おじいちゃんは心配性だから。ほら、いつもむつりしてゐから、そのあたりの口調の配分が苦手なのよ。」

病院の、白い作務衣みたいなものを身にまといベッドに座つてい
る祖母はそう笑つた。

俺は、別に祖父に言われたから決心したんじゃなくて、最初からそ
のつもりだつたんだということを強調して、家を出ることを祖母に
やんわり話した。

家に戻り、祖父にその話をするど、もう祖母は電話で祖父にそう伝
えていたらしい。祖父は、言い方が悪かつたようだと困つていたが、
俺は改めて先ほど祖母に話したとおり説明した。

こうして、アパートで一人暮らしすることになった。

物件自体は随分前からキープしてあつたのか、すぐに手続きを済ま
せることが出来た。巨大な冷蔵庫とかは十数万もしたけれど腰の高
さくらいの小型の冷蔵庫は三万円を切るし、リサイクルショップで
大概の生活用品をかき集めたら三ヶ月間で随分の余裕を作っていた
らしく、だいぶ手元に残りが出た。

苦労したのは引越し業者に頼まないで一人でそれらを一階の家に持
ち込んだことくらい。もともと、実家にも本と服以外の俺の私物は
ほとんどなかつたから、新しい家電が大部分を占めてた。

初めてアパートを覗き込んだ俺の第一声は「廃墟だ。」我ながらふ
ざけてる。

ガスの業者がガス開通に来ての第一声は「靴で上がつていいですか
？」ふざけんな。

前の入居者がどんだけのものぐさだつたか知らないけど、随分と酷
い有様だつた。

タバコか何かのヤニで洋式の便座は茶色に染まつていたし、カーテ
ンレールまで引っ張がしてつたらしくて窓枠の縁がガサガサだ。苦
しんで死んだ人間みたいな染みが天井の七割を占め、台所の床はベ
とべとしている。もちろんどの部屋も埃だらけ。

まあ、分かりやすく言うと、やっぱり廃墟だった。

大掃除に三日かかった。上から下に掃除する、を実行すると埃が雪

みたいに降ってきた。

で、これはどうやってもどうしようもないと思つたものの、きつち
り掃除したら「まあ古くて小汚い部屋ですね」ぐらいになつた。そ
んなのでも、やつと手に入れた俺の城だつた。

二年の夏になつて変わつたことと言えば、モムマートにクラスメイトのこれまた変態が来るようになつたことだ。元野球部で、夏の大會で引退してから暇になつたとかで。

変態、その、原嶋 雄一はモムマートで余裕綽々、レジのまん前の本売り場で成年誌を立ち読みしている。

迷惑なのは裕子さんと話をしているときに、積極的にその成年誌の内容がああだとかこうだとか言つてきて、やかましいことだ。それで、「死ねよ。」「くたばれ。」「ド変態。」「近寄るな不審者。」などと、あまりの不愉快さに悪罵を投げつけいたら、参るどこのか雄一は擦り寄ってきた。

そのやり取りを見て、まるで漫才でも見ているようだ。裕子さんまで喜びだした。なぜか回りには変態ばっかりだ。

それで、いつのまにやら悪友として家に上がりこんで人の飯を勝手に食つてはばからなによつになりやがった。

なんせ、休日に田を覚ましたら家の中に「そ」そ不審な音がする。まどろみなんか吹きとんでも居間に駆け込んだら、前の日にモムマートでもらつた弁当をすべて平らげていたりする。兵糧攻めか? ふざけてる。

雄一は細身で長身だ。顔はえらが張つてゐる。第一印象は魚のハゼ。調子が良くて、モノマネが巧い。歌が上手い。

ふざけたヤツだけど、将来俳優になると云う明確な夢があるらしくて、その話になると一時間は確定で捕まつた。アホだと思うけど、こいつの凄いところは、俳優になると云うことがどれくらい狭き門なのかを知つてゐるくせに、まるで当たり前のようになにか夢をかたることだ。いつも、俺が希望すればマックでバイトすることが出来る、と言つべつら一の口調だ。

嫌っていたのは、大学にいけば良いところに入社できるんじゃないのか？なんていう曖昧な考え方だ。

つまり、子供のように描いた一つの夢を追うこと信じきっている。学生として学ぶべき、考えるべき時間を過ごすことに無頓着な人間は大嫌いなのだと。

「それをいうなら、夢すら持つてねえ俺は最も嫌いなジャンルの人間だろう。」
「いつめ。」

と言つたら、

「なんてゆーか、お前は全部自分でやつてもう社会人と同じじゃんか。自立してる。お前が後はもう少し柔軟になればそちらの偉人よりよっぽど尊敬する。」

なんて、子犬みたいな、下から見上げる子供のような真っ直ぐな目で言われた。

「……キモイな。なんだそれ。俺のはそんなんじゃねーよ。」

ざわざわと、固まっている俺がふやける様な嫌な感覚。認めるわけにはいかなかつた。

不愉快じやないけれど、不安な感覚。

雄一は臭いことを平然と言つ。正直、それによつて自分に酔つてゐる様に感じるときがある。

ただ、俺が、こいつがいることを認めるのは、こいつは殻を持つてないくせに、芯を持つているからだ。

俺が排他と拒絶と否定と意地で出来た殻で自分を守つてゐるのに対して、こいつはまったく無防備に、柳のように柔軟でいるくせに、その癖、人と人の間を埋めるだけのパーソンじゃない。

雄一は、オリジナルだつた。

人氣者で、馬鹿で、なぜか壊滅的にもてなくて、アホだ。

学校で屯している連中も、夜中に下品に騒ぎ立てている中坊にも、ブランドを誇る子供な大人にも感じなかつた感情だが、俺は唯一こいつを尊敬していた。それと、何故かそう思うけれど、雄一もまた俺に対して何かしら敬意を払つてゐるようだつた。

高校生の分際で、地元の癖に一人暮らしをしている俺に向けられる様々な色の視線の中で、俺は一際そういうマイナスの視線に敏感になっていたわけだけど、裕子さんと雄一には、一切そういうものがなかった。

特に雄一に関しては、学校でもしようと俺に絡んでくるようになった。

ただ何故か俺はそれに比例して、雄一を尊敬するのと同じくらい嫉妬して、怖かった。

雄一はその人懐っこいで誰でも仲良くなれた。

だから余計な面倒ごとにも巻き込まれるのだった。その都度、面倒ごとになるのがなぜだか分からないという顔をしている雄一に、から十五ぐらいまで懇切丁寧に噛み砕いて教えるつていうことが何度も何度もあった。

それをこれこれこういうわけでお前が悪いとか、相手が悪いとか教え込んで、雄一が悪いんならどうやって謝ればいいのかとか。相手がどうしようもないなら付き合いを考えたらどうだとか。

まったく、人事になつたら何でこんなに冷静に分析できるのか。てか、俺にそんなことを聞くな、とか思った。俺、お前から見たって友達少ないの丸分かりアホ、と。いつも思つた。

そんなこんなで、冬を越して春が来た。卒業だ。

それが何の変哲もないものだ、と言えるくらい自然に、雄一や裕子さんが家に遊びに来た。そんな日々が終わり、まるでアルバイトと日々の暮らしど、それと高三の夏からの数ヶ月だけがすべての学生活は終わった。涙が出ないどころか、感慨は微塵も湧かなかつた。

式でボロボロ泣いていた雄一は俳優の何とかと言つ養成学校に合格したらしい。もともと落ち着くなんて言葉が辞書に書いていないほど、サークスの道化じみたテンションのやつだったけど、このとき

ばかりは危なかつた。

まったく参加する気なんてなかつたのに、とりあえず無理やり引っ張られたまま卒業記念のクラス打ち上げに参加。

忌々しく、遺伝で酒に強い俺は周りでの乱痴気騒ぎにいたりつきながら、もくもくと飯を食つて、ちびちびと酒を飲んでいた。タダつてことになつてゐるから、いつとかなきや損だ。

雄一は引っ張りだこで、いろんなところで浴びるように酒を飲まれてすぐに千鳥足というか這いざるような有様になつていた。しばらくして、あたり中にギブアップを異常に連呼しながら雄一が隣に倒れこんだ。

「吐くなよ、変態。」

「まだ大丈夫だ。治、二次会行くぞ。」

「はあ？ 即刻かえつて寝ろよ。アル中で死ぬぞ。」

夢でも見てゐみたいに、寝転がつたまま雄一は空に手をひらつかせた。目の前に金魚でも泳いでゐみたいに。

「二次会はお前んちだ。」

「はあ？」

「もう騒ぐつもりはないつて。少し、締めはお前と静かに飲む。お前楽しんでねえじやんかさ。」

「酔つ払いが騒ぐの見ると嫌な事思い出すんだよ。」

「まあ、もう少しだけ我慢してくれつて。」

それで済し崩し的にうちに上がりこんだ雄一は勝手知つたるなんとやら、台所から焼酎を持ってきて、持参のサイダーで割つてすぐさまチコーダーを作つた。馬鹿みたいな勢いでグラスの半分あおつて、背中を伸ばして顔色を変える。

「治さ、これからどうするんだ？ どうか就職するのか？」

「さあ。俺もわかんねえ。」

俺の返事に頓狂な声を出して、雄一は残りをあけた。まじめに返事を返さないお預けだぞ、とばかりに俺の前にあるグラスをひつたくる。だいぶ、じぼれた。

「俺、親友つて言葉嫌いなんだ。」

ため息混じりにティッシュでテーブルを拭く俺に、雄一は低い声を浴びせてきた。

「他人から友達になる。その先、友達と親友の線引きをするなんて失礼だと思う。女友達と恋人の線引きは分かる。男友達と女友達の線引きもしかたない。けど、親友つて区切りを作つたら、じゃあ友達つて他人じやないかってさ。」

「考え、極端すぎる……それに何が言いたいのかわからんねえよ。」

「嘘つくな。お前は真剣な話になると急に自分を蔑ろにする。……

俺はな、治。お前のこと親友だと思ってる。」

「……酔いすぎだ。」

「ああ、酔つてるよ。でもな、何を言つてるか分かる程度には平静だ。それで、普段いえないことを酒の勢いで言つてんのも、分かってるさ。」

ひつたくつたままの俺の分のチュークーダーを半分一気飲みする。

「前も言つたけど、お前は視野が狭いんだよ。こうと決めたら一直線だ。もつと柔軟に考えたらどうなんだ？そんなに自分をいじめなくたつていいだろ？おい、こつち見ろ。」

テーブルを拭いてた俺に、言つ。

「心配なんだ。お前、ひとりの時はいつも追い込まれたような顔してるしさ。」

じわりと、何かが染み出す気がした。

あんまりにも、その慣れない感覚が忌々しかつたから、乱暴に雄一からチュークーダーを取り返して残りを一気飲みした。

甘つたるくて、安物の焼酎の鼻につくアルコール臭が、胃の中でぐるぐる回つた。

「俺も、酔つてるだけだからな……クソつまんねえ話をすつけど……

今だつて、隕石降つて来て死ねねえかなとか思うし、明日どつかの誰かが偶然このアパートに放火して、酔つて起きない俺を焼き殺さねえかなと思うんだよ。……俺が生きてんのはただ、俺や家族

を追い込んだクソ親父に負けたくねえっていうだけのつまんねえ意地だ。アイツ、俺がガキのころから出て行けとかぬかしてやがつて、出て行けねえ俺に、意氣地なしつつて罵つてきやがつた。勇気がねえつてさ。」

ははは、なんて自嘲的に笑いがこぼれた。もひ、言葉は止まらなかつた。

「警察の癖について、虐待に耐えられなくなつたガキの頃あいつに言つたら、首縊めて殺されそうになつてな。まあ、お袋のおかげで今もこつして生きてんだけど。アイツ、無趣味で、家に帰つてきたりただ酒飲んで、仕事で溜まつたストレスは全部俺たちに向いてた。アイツに残つてんのつて、警察で働いてるつて事だけみたいでさ。俺がガキのころ友達と遊ぶ約束を電話でしたら、電話口で馬鹿と付き合つなどか怒鳴り散らしたり、受話器ひつたくつたりな。俺も、おかげでガキのころから友達もいねえし、無趣味になつてつたよ。まわりじゃ、なんてつたっけか、ミニモーターカーのパーツ組み替えるやつとか、ハイパー・ヨーヨーとかカードゲームが流行つてたけど、そんなん買つてもらつたこともねえし。みんなと同じものつてないと、仲間に入れないと子供つてな残酷だ。」

黙つて、雄一はこつちを見ていた。無駄に、馬鹿みたいに真剣な顔して。

「クソ、話がまとまんねえや。とにかく、自殺したら負けた気がして。でも、無趣味で、友達もいなくて、あとは無駄に遺伝であいつに似てるつて思う自分が大嫌いでさ。意地で、負けらんねえつて高校も卒業したけど、じゃあその高校つて縛りが無くなつた俺に何があるんだつて、何がしてえんだつて考えたらカラッポでよ。大学やら専門に行く余裕なんざねえし、お前みたいに夢なんてねえから行こうとも思わねえし。でも、じゃあ就職したらと思うけど、それもピンと来ない。同じだ。あのクソ親父とまったく同じ。大ッ嫌いなんだよ、俺は、俺を。だからきっと、このままでいつの間にか自分でも気付かないうちに消えちまいたい、それが夢なんだよ。俺は擦り

切れたみたいな、ちつぽけな意地で生きてんだ。多分生きるために生きる機械みてえに。でも、考えても考えてもさ、生きてる理由なんてわかんねえし、……辛い。」「ムカツク。」「ああ？」

「ムカツクつていつたんさ。お前が、どれくらいそれに悩まされてきたのか、聞いたつて俺にや分かんないつつーの。なんてフォローしたらしいかも分からんしさ。ただ、お前がグジグジぐずぐずしてんのはムカツク。」「ツ！ テメエに何がわかんだってンだよ！」「だからわかんねえってんだろ。」

真夜中、一つの怒鳴り声。一つの突き放すような冷めた声。勢い良く倒れたグラスに、罐が入った。甲高い音がした。

「わかんねえけどよ。お前、俺や裕子さんとつるんでる時、死にたいなんて面したことねえだろ。お前笑つてたじやねえかよ。」「雄一は、乗り出していた俺の胸をとんと突いた。

「甘つたれんな。都合の良い時だけいじけてんなよ。お前が先を見れねえのはまだ仕方ないかもしれないけどな、でも人のせいにして死にたいなんて弱音吐くな。自分でやりたいことのために立つのも、自分の足で一箇所に何とか立ち続けんのも、どっちも自立だろが。……つらいのなんか当たり前だろ！」

最後だけ熱がこもった声を出し、俺を突き放して、雄一は台所に駆け込んだ。グラス一杯に注いだ水を一気飲みして口を拭う。

「……もう帰る。」「……そうかよ。」

壁に肩を擦り付けながら、雄一は玄関で振り向いた。

「さつきの話の線引きな、きっと腹の底のどろどろした所をぶちまけられるかどうかだと思うんだ。アホ、死にたくなる前に、もっと早く言えや。うぜえよばあか。……ああ、すつきりした。」「ばたん、と。玄関のドアが閉まった。ゆっくり、雄一が金属製の外

階段を下つていいく一歩一歩の音が、アスファルトの硬い音が、真夜中に響いてく。

「畜生……そんなこと……」

ぶちまけて聞いた自分の声の情けなさ。
ずっと前から考え続けて、とうに分かつてゐるやるせなさ。
それでも折り合いをつけられない自分の不甲斐無さ。
負の感情が混然と混じりあい、涙が出た。

「畜生……。」

ドアが閉まつた音が耳鳴りになつて、いつまでも余韻を残していた。

それから一ヶ月くらいたつた。

あれ以来雄一とは会っていない。朝起きたらいつの間にか上がりこんでいるつて事もなかつた。養成学校が厳しいのか、或いは。どちらにしてもこっちからは連絡を取らないもんと、雄一の近況は分からなかつた。

俺は、というと週一度モムマートに入る以外ほぼすべて、毎日のようすに越野家のバイトに入るようになつた。高校を出たつて事で深夜にシフトを移行してもらつた。このころから金銭的に若干の余裕が出てきた。

店長にはよくしてもらつた。事情を知つてはいるわけじゃないのにどこか配慮してくれてはいるようだつたし、それに「もしその気があるなら正社員として推薦しようか?」とも言つてくれた。

ただ、いまひとつそれはピンと来ない。きっと、甘えだらうと思うけれど、それでもこんな気持ちのままその好意に甘えるのは、後ろめたい気がした。

モムマートの方はといふと、正直なところ辞めようか迷つていたところだつた。長く、高校三年間ずっとお世話になつてきて、三年になつてからはこっちの都合を聞かずに掛け持ちをすること許可してくれたオーナー店長と奥さんに義理を感じていたけれど、深夜営業のないモムマートの半端な時間帯は身体のリズムを作るのに大変だつた。

しばらく考えてから、それを裕子さんに相談した。

思つたとおり彼女はありとあらゆる論調を使って俺を引き止める方向でアドバイスをくれた。それをひとしきり黙つて聞いたら、冷静になつたのか一つ声のトーンを落とした。

「なんてねー。私が辞めて欲しくないってだけなんだけね。」

俺と違つて、別に後から入つてくる新人アルバイト達と仲良く出来

ないわけじやないつていうのに、折れて消えそうな寂しい愛想笑いに、曖昧に言葉を濁すことしか出来なかつた。

「まあ、また家に遊びに行くから同じかなあ。」

今度はそんな俺のことを見て、あつけらかんと笑い飛ばす。

「まさ、原嶋君連れてカラオケでもいこつか。治のモム卒記念で。

「

「雄一は…」

「ノリが悪いよ？お姉さん涙が出ちやうなあー。癒し系の称号、剥奪しちゃう。」

「剥奪してください。でも…………そうですね。声かけとりますよ。」

「やたー。」

大きく万歳のポーズを取ろうとして、裕子さんはふわりとした白い長袖のズリ落ちるのを気にしてた。素肌を晒さない何かのルールなんだろうか？

まあ、奇行やら突飛な言動が多いのが裕子さんだから、覚えた違和感はすぐに引いていった。

越野家のほうは、月を前後半でシフト分けだつた。月末と十五日にシフト表が新しく出される関係で、約束から一週間もたつたころやつと、俺から雄一を誘つてカラオケの日取りが決まつた。

正直な話、俺の方はこの間のことを引きずつてゐんじやないかつて、雄一に電話するのを散々ためらつたんだけど、いざ電話したらあいつ。

「おー。行く行く。」

なんて軽い返事だけ。電話越しの声はこれでもかつてくらい軽薄だつた。

引きずつてたのは俺で……俺が気にしすぎなのか？

酷く癪に障るからぶつきらぼうに時間と場所だけ教えておいた。それで当日。

前日の養成学校の打ち上げだか何かで最終電車に乗り遅れた雄一は

たっぷり遅刻するつて連絡してきた。日付を間違えて覚えてたとか。ああ、あれだけ軽かつたなら覚えてないだろうさアホ雄一め。

このままだと時間単位で待つことになるつて言つんで、先にはいつてることになった。

俺はアイスミルクティーで、裕子さんはたしかクリームメロンソーダを頼んでた。

一曲ずつ歌つては何か取り留めのないことを話して、そして思い出したようにまた曲を送信して歌う。そんな感じだ。

「あのさー、クリームソーダシリーズはこつちのテクニックをリサーキしてるんだとアイスリンク。」

また、何を突飛な…という話題の転換。そもそも、ソニーんやら東京事変の鬱ものを歌つた直後に脈絡なく。

一般人の俺と違つて、やたら歌が巧い裕子さんや雄一がしんみりした歌を歌うと空気が変わつてのに。

それぞれが数曲歌つたころ、二杯目のクリームコーラが届いた。裕子さんは獲物を前にそう言つて、スプーンを一度口に銜え、腕まくり。戦闘体勢になつて腕を回す。

「はしたないですよ、裕子さん。」

「そうだけど。治が許してくれるなら問題ないでしょ？ハシタナイのはやだ？」

「もう慣れました。」

そう、じゃ良かつた。なんてけらけら笑う。

「それでこれつて炭酸ジュースにアイス沈めちゃうと泡になつちやうでしょー？でも適度に下のジュースを絡めたいじゃん。このアイスについてジュースが凍つたみたいなの美味しいしー。」

「あー……」

俺は、ピントのあつてない返事を返した。そういうえばクリームソーダつて食つた事がなかつた。少なくとも覚えている間には。

「それでさー、このアイスの下の氷の浮力をいかに活用するかが腕の見せ所だと思うの。こう、アイスをスプーンで掬う時にこうやつ

て……ほらこんな感じ。」

クリーミーソーダ類の食べ方の失敗がどんなのがわかるないけれど、裕子さんは満足の行く掬い方を出来たようで、やたらうれしそうだつた。

「あー……なるほどー」

水をさすつもりはなかつたけれど、なんていつていいのかわからなくてまた氣のない返事をしていた。

「よーし、もはや私が教えることはない。治は今からクリーミーソーダ免許皆伝じや。」

「それは、辞退します。」

「そんなこと言つなよー。ほらこのアイスクリーミーあげるかい。」

「ちよつと…待つてくだ…裕子さん」

口元にスプーンを突き出して、裕子さんは悪戯っぽく笑い始めた。さつき裕子さんはスプーン舐めてたし、口づちが慌てるのを分かっているんだろう。

「あはははははは…」

何故か不意に、追いかけてきた笑い声が寂しげに聞こえて後頭部が冷たくなつた気がした。俺は裕子さんの手首を握り、やつと止まつたスプーンに一度深呼吸。

「そういうことは……。」

何度も聞いて覚えてる。裕子さんの彼は、決まって十時過ぎくらいでモムマートに来る、柔和そうな人だ。背はやや低めで、商品を受けるときに入懷つっこい笑顔で礼を言つてこぐ。裕子さんが、とまつり声で話しかけて來ることもあつたくらいだ。名前は松沢 まつざわ 正義 まさよしさん。

裕子さんが言つとひの、癒し系。思つに、彼女が言つ俺と違つて生糸の。

それを思い出した。

「…松沢さんにしてあげてください。」

笑い声が止まって、握っていた手がびくくりと震えた。裕子さんはそ

れから一度、「ごめん。とつぶやいた。

「少し、はしゃぎ過ぎちゃった。」

裕子さんは、すい、と逃げるよつに視線を泳がせた。いくら俺が鈍くたつて、分かる。

「裕子さん……。」

溶けかけたアイスクリームがスプーンからたれた。思い出し、握っていた手を緩める。白く、細い手首があらわになりそこに刻まれている何本もの線に気がついた。

伽藍と頭が白くなり、ソニンの曲が、東京事変の入水願いの歌詞が蘇つた。

「ツ痛つ！」

俺が思わず強く握った痛みで、テーブルにスプーンが落ちた。きんからから、なんて。

「裕子さん！ なんで……」

ボックスの扉が勢い良く開いた。間延びした、全く悪びれた様子なんてない雄一の挨拶とも、謝罪とも雄叫びともつかない声が響く。

「あれ？ なんだこの空気？ 俺失敗したか？」

「いや……」

ああ失敗だ。と思う反面、おかげで混乱する頭に怒りが満ちなくてよかつたなんて矛盾したことを考えていて その自分に嫌気がさした。

「原嶋君遅いぞー。あはははは、ふざけて治にアイスをあーんしたら怒られちゃったー。」

裕子さんはこともなしという体で、俺が雄一に気を取られている隙に、するりと手をひっこめる。腕まくりを戻しふわりと袖で手首を隠してテーブルのアイスを拭いた。

「なにい！？ 裕子さん俺にもお願いしますよー。」

「ダメー。さてやつとオールスター勢揃いだね。仕切り直しで私からいくよー。」

そして入ったのは大塚愛のHAPPY DAYSだった。すぐさま

リズミカルな音楽が始まる。

それから底抜けに明るい歌だけを、裕子さんは続けて歌つた。終わりの時間まで、ずっと。

蛇口を皿一杯捻つて水を流した。ざあざあと飛沫が飛び散つてかすかに服を濡らす。

料金が安い代わりにお世辞にも立派とはいえない設備のせいで、他所の部屋からここまで歌声が漏れ聞こえてくる。音程が無い絶叫と演歌。うるさい。

時間をかけて手を洗う。

あれから何度皿になるのかも分からぬトイレだった。

裕子さんの歌はまるで、大声を上げて泣きたいから一際声高にアッテンポの曲を歌つてゐるようになかなかった。

雄一が得意の恋愛バラードを聴いて、拍手と歓声を上げていふときは、こつちは悲鳴を聞いているようだった。

視線を上げると、目の前の鏡に自分の顔が映る。酷い面をしてるな、と心底思う。

水を掬い、顔を洗う。まつたく変わらない自分の顔がむかついた。拭いて、頭を振つた。トイレを出ると会計を前に俺を待つてゐる人がいる。

「遅いぞ。待ちくたびれて延長したくなつたくらいだ。」

「いいねー。また延長しちやう?」

「いや、今日は。」

雄一は俺のやや低いトーンに気付かず、残念そうに文句をもらした。

「しようがないねー。じゃ、また来よーね?」

「もちろんですよ。」

「またメールする。……裕子さん、送つていきます。」

裕子さんは一瞬困つたように苦笑してから、悪いよー。と言つた。

「裕子さん、最近物騒ですから治に送つてもうつた方がいいですよ。なんなら俺もついてきますし。」

「いや、お前原チャリだろ？裕子さんも俺も歩きだから平気だ。」

「そか。わかつた。」

「うーん……治？迷惑じゃない？早く帰りたいんじゃない？」

わかつてる。アカルイウタしか歌わなくなつたのも、蒸し返したく
なんてないからだつてことくらい。

ただ、一曲一曲裕子さんがアカルイウタを歌つたびに、いつも言
わなきや我慢できなくなつたんだ。つてか、そういうつまつつの選曲
かとさえ思う。俺はまんまと頭にきていた。

はたと、視線を雄一に向けた。そんな俺に気付いてからきょとんと
して。

「なんだ？俺の歌が巧かつたからつて惚れちゃいかんぞ？」

「とりあえずお前は死ね。」

雄一はあの時、こんな感情と折り合いをつけたのか…。

小さく細い深呼吸を一度した。

「ぜんぜん迷惑なんかじゃないですよ。俺夜型ですし。」

「……じゃ、お願ひしちゃおつかなー。」

裕子さんは屈託なく笑つて、そう言つた。

女の子が喋るバイクと旅をする小説の、そのバイクに似ていると選
んだらしいYB-1にまたがり、雄一はひらひらと手を振つた。す
ぐに影が見えなくなる薄曇りの夜に、軽いチャンバーの唸りを残し
て帰つていく。

「俺らも帰りますか。」

「うん。」

しばらく、黙つて並んで歩く。情けないことにして、アレだけたくさん
用意したはずの言葉がどつかに消えてしまつていて。

裕子さんは可笑しな人で、底抜けに明るくて、思い返せばいつでも
笑つている人だった。マシンガンのようにしゃべり続けて、でもな
んだかんだで聞き上手でもあつて、少なくとも裕子さんは…。

「ごめんね、治。」

「、」

先に口を開いたのは裕子さんだった。

とつたに、返事が出来なくて息が詰まつた。

「ごめん。心配かけちゃつたみたいでさ。」

「なんで…。」

少なくとも、裕子さんは俺のよつたな場所まで落ち着くいけない女性のはずなんだ。死ぬだの死なないだの、そんなことを考えちゃいけない人のはずなんだ。

「別にね、自殺しようとかじゃなくって。ただで、落ち着くの。」

『落ち着く』

体が震えた。

自分が嫌いで、延々と自分を責めて、自分を呪つて、自分を拒絶して。自分を傷つけて、それで落ち着く感覚。

はたと一人で振り返つたとき、酷く身近にその感覚がある。吐き気がするくらい、俺にも分かる。

「鋸びて、切れないうような剃刀で引っ掻いてるだけだから、自殺とかそういうんじゃないの。本当に。」

だから、安心して。とでも言いたいのか。

「ふざけ、ないでください。自分を傷つけて落ち着くなんて。」

そう、そんなのは自殺と同じだ。

自分を傷つけて、血を見て、自分が自分を否定し、殺したことに対する堵を覚えている。

眉根をひそめて、裕子さんは言葉を選んでいた。ぼつり、ぼつりと言葉を繋ぐ。

「ふざけてなんて無い。だつて……正義に、婚約者がいてさ。」

心が、松沢さんに残つていてるから。

「もう私が付き合い始めたときにはいてさ。」

だから、それでも松沢さんを正当化したいなんて事を考えるから。

「きっと、正義は遊びとか冗談で私に声をかけたら、私が勝手に好

きになっちゃつてや。」「

たつた今、彼女が口ひいてこるこの言葉すら、鋸び付いて余計に良くなれる剃刀だった。

「だから私が悪いから……」

「違う……」

とつさに体が動いた。裕子さんの双肩を、つかんでいた。

「治……痛い、よ。」「

裕子さんは苦痛に顔をゆがめ、顔を伏せて目をそらす。あの日のデジヤヴをみているようだ。

「こっちを見てくださいよ。」「

頭の隅で、冷めた考えが浮かぶ。

一体俺に何を言う資格がある。俺だって死にたがりだ。雄一の真似しているだけだろ。

「……痛いよ治。『ごめん、怒らせてごめんね。』だから放して。」所詮、眩しい雄一のようになつてみたいだけだろ。迷惑だろ。わかつてゐるはずだ。俺だってあの時雄一をつっぱねたじゃないか。肩をつかむ手を緩められなかつた。

自分の中を覗き込んで、裕子さんを救えそうな言葉が見つけられなかつた。裕子さんが言つところの『怒り』があるとするなら、自分の無力に対する怒りだつた。

「松沢さんが裕子さんを口説いたんじゃないですかー婚約者がいるのに黙つていたんじゃないですか。悪いのはあつちじゃないですかよー。」「

ここに来て悪人探ししか?なんて馬鹿。違うだろ。

「……正義を悪く言わないで。」「

「嫌です。じゃあ、こっちを見て言つてください。その言葉が本気なら、本当に自分が悪いって思つてるなら俺を見て言つてくださいよー。」「

本当は、もつとちゃんと励ましたかった。

松沢さんへの嫉妬か。

本当は、裕子さんを抱きしめたかった。

まるで親父が拳を振り上げているときのよう、女々しくて情けないことに体がびびっていた。

「俺、裕子さんが…」

何時だつて、まどろみの泥沼の中を歩いていたようだつた。どこまでも続く真っ暗なトンネルだ。すべてがどうでも良くて、リアリティなんて無くて、自分を含めてすべてがくだらないと思つてた。俺を除くすべてがトンネルの外だつた。

それは、家を出たつて同じだつた。

一人でずっと考えてたつて、出口なんて無かつた。じめじめと自分の殻の中で想いが回り、どんどんくすんでいくだけ。より粘着質をまし、どつぱりと自己嫌悪に浸る羽目になるだけだつた。独りじや、自分すら救えない俺を助けてくれたのは、他でもない裕子さんと雄一だつた。

トンネルの壁をぶち抜いてきたのは彼女だつた。多分素でだらうけれど、何度も何度もリハビリのように声をかけてきた。つづけんどんな返事にすら。

何度も松沢さんのことを見ていたから気付かないふりをしていたけれど。

「本当に、……心配なんです。」

言葉は剃刀だ。

「裕子さんのこと、親友だと思つてるから。」

嘘だ。ずっと本当に護りたいと思つていた。きっと、女性として、異性として、愛おしいと思つている。

「ここに来ての自虐か。

「全部背負い込んで、自分を傷つけて……心を殺している裕子さんを見たくなんてないです。」

裕子さんの心は、松沢さんに残つてているから。

「彼を悪者に出来ないなら、自分を赦せないなら、俺が裕子さんを赦します。裕子さんは悪くないって、何度も言えますから。」

きつと、俺の想いは重荷になるから。弱つた気持ちで俺に寄りかかつた自分のことを、いつか裕子さんはまた責めてしまつ気がするから。

「だから、自分を責めないでください。」

岩みたいに、ギシギシいう指を、やつと裕子さんの肩からはずした。

裕子さんは手首の痕を見つめ、静かに、しばらく泣いた。ダイヤモンドか真珠か。そんな透明な涙だつた。

再び、黙つて並び歩いて五分ほどしたところ。

「ねえ、治。」

もうすぐ裕子さんの家が見えるところになり、口を開いたのはまた裕子さんだつた。

「なんですか？」

「これから治んちに行つてもいいかなー。」

「駄目です。」

「すこし、お酒飲みたい気分なんだけど。」

「親父さんと飲んだらどうですか。」

自分でも驚くほど、冷たい投げやりな声が出たと思つた。

「治と飲みたい。」

「俺は飲みたくないです。」

「つめたいなー。治つてば癒し系なのにー。」

「俺は癒し系なんかじゃない。俺に松沢さんを見るなら、やめてください。」

「つ……」

「じゃあ俺帰……」

肩を引かれ体が開く。がちり、なんて音がした。

「痛つてえ……」

「んつ、失敗したー。」

不意打ちで唇を合わされた勢いで、裕子さんと歯がぶつかつた音だつて、少し遅れて気がついた。

「何を…」

「ねえ、治。さつきも、好きって言いそつてたじゃない。」

口に血の味が広がった。唇が切れたらしい。つきり、と痛む。

「今晚、泊まりに行っちゃ駄目かな。一回だけでもいいからセハ。

裕子さんはそんなことを、言つた。

愕然とした。訳がわからなかつた。さつきの涙はなんだつたんだ。

「私も、治のこと、好きだよ。」

だからそれは勘違いだろ。気が弱つてるから、そう思つだけだろ。裕子さんの薄笑いと、赤い唇の生々しさが、酷くグロテスクに思えた。

「いい加減にしろよ！－何でわからねーんだ！」

さつき抑えたはずの激情が今更爆発したようだつた。反面、裕子さんこじんだけ嫌われようと、悪罵を投げつけることで自傷行為を思いつどまるなら、それもいいかなんて冷めたことを考えた。

「不安だからつて今度は俺を剃刀代わりにする気なんだろ！－ふざけんな！」

まるで、今にも薄ら笑いさえ浮かべそう田で、裕子さんは激怒する俺を見つめている。

「癒し系なんて自分でつくつた嘘に踊つて、自分を責めることが馬鹿馬鹿しいつて何で分かつてくれないんだよ…」

終わると思った。最後まで言えば、俺を救つてくれた絆は簡単に切れてしまつと思つた。

「俺が好きだつたのはそんな裕子さんじゃない！－ウザいんだよ…」

「…あはは、私のことなんてろくに知らないいくせに…」

「知らねえよ！そんなん知りたくもねえつ！全然魅力的じやねえよ

！」

「、彼女も居ない童貞の癖に…」

「そんな歪んだ『好き』に付き合わなきやならないなら童貞で充分だ。」

「アハハハハツ！強がつてつ！ホントは勃たないんじやないの！？」

インポヤロー！…

「今のアンタじゃ勃つわけねえだろ！超ウゼえ！」

「ああ、これで終わりだな、なんて静かに思った。

「そんなことだからあんな男に騙されたんだ！いい加減目を覚ませよ！」

「ぱあん、」という音。強烈なビンタをもらつた。

頬が熱い。ただ、ささくれ立つたざらつく気持ちが、滑らかになつていく気がした。頬の痛みと反比例で茹だつた頭の熱が引いていく。全部、終わつたんだ。

結局、俺と雄一はまったく違つたわけで、俺には裕子さんを救つことなんて出来なかつたつてだけ。

「ふふ、なんて笑つちました。

「あーあつー！」

裕子さんは急に伸びをして、大声を上げた。

「治、たつた今、癒し系剥奪だから。あー……綺麗にこれでもかつてフられちゃつたー。」

憑き物が落ちたような、予想外に爽やかな声だつた。

「さつぱりしたー。」

裕子さんは踊るように、ステップを刻んで俺から離れる。

「残酷だよ、治は。癒し系なんかじゃない。」

その口調で分かつた。裕子さんは

「……氣付くの、おせーです。」

「ばあか。治のばあか。」

「わかつてますよ、そんなん。でも裕子さんも、馬鹿みたいに不器用過ぎです。」

「……絶対後悔するから。あのウソツキ男も、治も。」

にこりと、小悪魔のように笑つた。そう、裕子さんはその笑顔が魅力的だと思う。

「私、尋常じゃないほどいい女になつちゃうんだから。」

「……無理なほうに賭けます。」

「ばーか。でもね、治のザンコクなとこ、ホントに嫌いじゃないよ。」

「ありがとね。やっと折り合にがつきそつだよ。」

くるりと背を向けてから言った。裕子さんは手を振って、そのまま振り返らずに家に帰つていった。

始まつてもいない、初恋の終わりだった。

「……嫌いじゃない、か。」

カラッポの声でふと、思い出した。さつき自分は雄一のようになんて思つていたこと。

頭を搔いて、ため息を一つ。

「なんだそれ。雄一になりてーのか?俺は。……馬鹿か。」

鼻で笑い、足を家へと向けた。

梅雨が明けた頃、モムマートを辞めた。晴れて越野家の深夜バイト一本に絞ることにした。

あれから裕子さんはしばらく手首を隠す服を着ていたけれど、しばらくしたら手首を普通にさらす服も着るようになっていた。俺が気にしているのに気付いて、もう大丈夫だつてー。なんて頬を膨らませたりした。

少なくとも、話をする限り以前と同じように見えた。相変わらず勝手に家に侵入もするし。

やつとこの頃になつて分かつてきただけど、どうやら雄一のやつは本気でハードなことをやつていてるようだ。どつかで聞いた適当な学校じゃなくて、雄一のところは何人も本物を輩出しているところだ。ダンスどころか日本舞踊の分野までやるらしい。ずかずかと家に上がりこむ人数が減つたおかげで、少しばかり睡眠時間が増えた。少し退屈にはなつたけど。

しばらく、何の変哲も無い平坦な毎日だった。変化があつたのは蝉が最後の力を振り絞つて鳴くようになったころ。

お袋から祖父が入院したというメールが来た。

うちのアパートに空調は無い。その土曜日はもともと暑さに強い性質の俺でも、頭にお絞りを乗せ、扇風機にかじりついていたのを覚えている。ピークを超えたはずなのに本当に暑い日だった。

すぐさま店長に連絡し、夜のバイトを休ませてもらつた。

正確には一週間ほど前に倒れたらしいが、お袋もばたばたとしていたため俺への連絡が遅れたらしい。天然だからつてそちらくんは本当にきっちとして欲しかつた。

準備を済ませてから祖母に電話を入れた。病院にいるのか電話は繋がらなかつた。お袋にメールを送つても返事が無い。祖父の病状は

結局どうなかわからなかつた。

何か、見舞いの品を持つていこうと思ひ、途中の八百屋で果汁百パーセントのジュース詰め合わせを買つた。もし食べられない状態でもこれならある程度日持ちもするし大丈夫だろうつて。

病院の場所は分かつてゐた。俺が暮らしているアパートからたいした距離じやない。自転車で、十数分でついた。

自動扉をくぐり、正門のところで手をアルコール消毒させられた。ロビーで病室を教わり、突き当りの病室に入る。ベッドがいくつか並んでる最奥、窓際のベッドにネームプレートがあつた。消毒の匂いが、鼻についた。

祖父が横になる枕の横には、見たこともない機械がおいてあつた。コードと、チューブのようなものが何本も走つていて。いつたいどんな状態なんだ、祖父は。

「多田さんは、今リハビリ室にいるよ。」

ベッドの向かいのお爺さんが声をかけてきた。振り向き、ありがとうございます。と礼をいった。

ベッドの横にしつらえられているテーブルに、見舞いの詰め合わせを置いて、リハビリ室に向かう。

ロビーと、祖父の病室のちょうど中間あたりに、リハビリ室はあつた。入り口に近付いただけで、中の様子が見て取れた。

比較的、このリハビリ室にいる患者は歳をとつてゐるようだつた。ふと見渡しただけで、車椅子に乗つてゐるような老人ばかりなのが分かる。

ここに、祖父がいるつていうのが信じられなかつた。

祖父は俺よりも更に十センチほど背が高かつた。写真を見せてもらつたことは無いけど、きっと若い頃はハンサムに違ひないという、精悍な顔立ちの爺さん。それが俺の印象だつた。笑点の桂歌丸を凜々しくして、巨躯にして、毛を増やした感じだ。

家にお世話になつてゐたときは、毎間たまに仕事の手伝いをしてい

た。そのときも、百数十枚スラックス生地を重ねた束を、両手に一個ずつ持っていた。布と言えども大体十五キロほどはある。

配送では一日何十キロ、ともすれば百キロを越える距離をハイエースで走り回っていた。汗をかけば、ペットボトルのコーラを好んで飲んでいた。

七十を超えてもそんな祖父だった。

「どうかなさいましたか？」

入り口に突っ立っていた俺に、リハビリルームから男の看護師が質問してきた。

「あの、多田 豊次^{ただ とよじ}が入院していると聞き、見舞いに来たのですが。

俺の返事に、ああ、と小さく頷いて、その看護師は膝ほどの高さのベッドの方を案内した。

「今マッサージを受けているところですよ。大丈夫ですから行ってあげてください。」

「すいません。」

会釈を返し、ベッドに近寄っていく。上に覆いかぶさるよつにして

さつきより大柄な看護士がマッサージをしているのが見える。

少し近付いて、看護師が抱えている祖父の足を見たとき、ぎくりとした。

看護師の脇から背に向けて見えていた、祖父のふくらはぎから先だけを見て祖父の状態が分かつてしまつほど、その足は細くなっていた。

「治か……」

衣擦れのような小さな声。数秒して、看護師の影からひかりを見ていた祖父の声だとやつと気付いた。

「うん。お見舞いに……」

止まっていた足を必死に動かす。次第に見えていく祖父の寝間着姿。血が氷水になつたみたいだつた。

祖父はかつての、俺が抱いていたイメージとはかけ離れた姿だつた。

病室にあつた装置と同じものから、チューブがのびている。鼻から肺へチューブが入っていた。

看護師は丁寧に、足をマッサージし、足を持ち上げたり曲げたりしている。満足に動かないからだが硬くなつてしまわないように。もともと歳相応に瘦せている祖父だが、まるで本当に骨の上が皮一枚になつてしまつたようにやつれている。

目も、つかれきっているようだ。今にも消えてしまいそうなほど弱弱しくて、俺は不意にこみ上げる感情を抑えるので必死になつた。「ありがとうなあ。……もう少しで終わるから、椅子に座つっていてくれい。」

見るからに満身創痍の祖父は、チューブが邪魔なせいか少し曲がった笑顔を見せた。

五分ほどのマッサージのあと、補助器にもたれながら床にある黄色い楕円のラインに沿つて歩いていた。一周十メートルほどのライン三周、それだけに二十分もかけて。大丈夫だと、額に汗を浮かべながら、こっちに笑顔になりきつていない笑顔を向けて。

終わつて車椅子に乗り換え、病室へと移動した。俺が車椅子を押すことを、祖父はしきりに気にしていた。

「そんなん気にしないでくれつて。」

そんな俺の言葉にも、曖昧に笑うだけだつた。満足に体が動かないぶん、余計に心が弱くなつてゐるみたいだつた。

病室に着くと、ちょうど祖母がもどつてきていた。ベッドの近辺の掃除などをしている。話を聞くと、いつもこの時間にリハビリが終わるからその間に洗濯などを済ませていたらしい。

祖母は慣れた手つきで祖父の脇に腕をいれ、あつといふ間にベッドへ移動させた。

思い返せば、しばらく祖父の家には顔を出していなかつた。お世話になつたあと、夕方と無く深夜と無く毎日、バイトに入つていたから、昼間は休みでもなければ動けなかつた。

まして、モムマートを卒業してからはそれこそ夜型に変わつていた

ため、車の教習以外では実家方向に出なかつた。

だから家を出る頃の、体調を崩した祖母の様子と元気な祖父と今の、対極的な二人のギャップに、なんだか凄い違和感を覚えた。

「ありがとなあ。久しぶりで……こんな格好では情けないが。」

祖父は目覚めたてのフランケンシュタインのような緩慢さで、襟元を直した。

「まったく、昔の人だからこんな時も見栄はつちゃつてねえ。」「せいぜいと呼吸の音が響く。チユーブの先の機械が、小さく唸つていた。それにかき消されそうなほど祖父の声は小さい。

「肺炎で、肺に水が溜まっちゃったのよ。」

祖母は病院慣れしているせいか、てきぱきと祖父の身の回りの世話をしている。

「もう、長くは無い。」

「まったく、弱気になっちゃつて。そんなに大変な話じゃないわよ。」

叱咤するような、責めるような、そんな激励の声だった。

「そうだって。トヨジは同年代に比べても仕事して、マジチョだつたしさ。すぐ良くなる。」

仕事、と言つ言葉に反応して、小さく祖父は体を揺らした。ああ、と唸つてしまらく黙り込み、そして。

「御札をしなきゃだからなあ。」

祖父はぽつりと口にぼし、俺はその電撃に貫かれた。

なんでだよ？

無意識に頭を伏せてしまつっていた。真つ直ぐに祖父のことを見れなかつた。

満足に体を動かすこともできなくて。肺に水が溜まつてしまつても苦しくて。

とても高潔なものを前に、自分がそれを見るのをばかられるほど矮小な気がした。

心も疲れて弱つてしまつて、いつの間にかつて。

なんで……そんな言葉をつむぐ」とが出来るんだろうと、思い。弱りきっている今祖父が言つた言葉こそが、祖父を形作る芯からの言葉であるような気がした。

胸を打たれ、昔からずっと自分自身の平静を保とうとしていたタガに鱗が入った。

「……トヨジイジューク好きだろ?… たすがに「一ラットわけにはいかないからや、百パーセントのやつ持つてきたんだ。」

別の言葉を何とか搾り出した。喉ギリギリまでこみ上げ、溢れそうになつていた濁流を必死に押さえ込んだ。油断したら途端に涙が出てきそうだった。

「おじいちゃんは今飲めないから、私たちで飲んじゃいましょう。」
冷蔵庫からテキパキと氷を用意し、コップに一杯グレープジュースが注がれた。

「氷を入れたら折角の百パーセントも薄くなっちゃうわね。」

俺の雰囲気を察したのか、祖母は甲高い声で小さく笑つた。祖父は、わしの分もちゃんと取つておいてくれよ、と低い声で愚痴つた。

「治。」

一口俺が呷つた時、ベッドの上で再び小さく居住まいを整え、祖父は真つ直ぐにこっちを見つめた。

「……どうかしたん?」

「わしももうこんなだからな、小言を言つのも最後になるかもしないが……わしは治が就職しないのが心配でな。」

「まったく、こんな時にまたお説教なの?それにまた弱音を吐いちやつて……ねえ。」

「お前は黙つていってくれ。治?」

真つ直ぐにこっちに向いている、皺くぢやな顔が、その双眸が、その説教が、心底俺のことを心配しているためのものだと、始めて素直に見つめ返すことが出来る気がした。

「……うん。」

親父の、心配よりも酔つた勢いの腹いせの口実じゃない。

今まで、そして今、祖父が纺いだとしている言葉はすべて、厳しい人生の先輩として道の一つを指示するための苦言だったのだと、やつと気付いた。

「少し厳しい」とを言つが……夢と言つのは胸に描いたときから積み上げ、その為に力を蓄えたものが謳つことを許されているものだ。

「分かっている。夢を実現する頂に到達するためには、様々な犠牲を払い全力で何かを積み上げていかなければならぬことは。例えるなら夢というのは、ピラミッドのようなものだと言つことは。だから、子供の頃の痛みを伴う記憶とか、ショックだったこととか、親父の虐待しか覚えていない俺には、夢なんてものは無いし、描く資格もないと思っている。

ただ、俺のそんな想いとは別の次元で、今の祖父の言葉を遮るわけにはいかなかつた。

「うん。」

続けてしゃべることも苦しいに違いない。祖父は乱れそうになる絡んだ呼吸を必死に整えている。

「子供の頃になりたいと思う夢、学生の時分に描く将来、仕事についてから新たに目指す目標。今、治に目標が見つからないと言つのは、わしからしたらどこか甘えがあるんじゃないかと思つ。」「……。」

「夢や目標は作るものだ。どんな仕事だつて、何年も勤めて次々に自分で作つていくものだ。」「……。」

せいぜいと、痰の絡んだ呼吸音がどんどん大きくなつていく。

「うん。」

今の祖父は折れてしまいそうなほど弱弱しい。その声もまるで蚊が鳴くほどのもの。しかし、それは低く唸る暴風を無理矢理小屋に押し込めたようだ。

「肌が粟立つほど鬼気迫る声だつた。」

「治が自分でどうにかしようと必死に立つのは立派だと思つ。しか

し、立つだけで必死になつて前を見られないのはいけない。治には、前を見て自分で目標を立てて実現しようとする努力が足りない。治の悩みの原因是知つている。だが、もうそろそろそれに寄りかかって、甘えるのは止めるべきだ。言い訳をやめる。仕事をしろ。そして学べ。どんな仕事も、どんな人生も、年数を経て見えてくる側面がある。」

いつの間にか、祖母は祖父の背をさすつていた。俺が目を逸らすまないと必死に、真つ直ぐに見つめ返している視野の端で、静かに目を閉じたのが見えた。

「……負けまいと歯をくいしばるのも重要だが、時には力を抜いて友を頼れ。信用できる友達よりも、信頼できる友達を作れ。自分に向いているその強い力を、少しずつでも人に分けられるように心がけるんだ。」

長く長く息を吐いて三度。祖父はこわばらせていた体をゆっくつと弛緩させた。

「がんばれ、治。」

「……はい。」

「まったく、嫌ね。歳をとつちやうと説教が好きになつちやつて。治、そろそろおじいちゃん休む時間だから」

「わかった。」

体が、妙にふわふわした。まるで座つていた椅子の上だけ重力が強かつたようだ。立ち上がって、緩慢な動きで椅子を寄せる。

「トヨジい、……ありがとう。」

祖父はむうと唸つて咳払いをした。おじいちゃん照れちやつてねえ。なんてくつくつ祖母が笑う。

「また来るよ。」

「ありがとねえ、治。」

祖父の代わりに祖母が返事を返した。凸凹といふか、阿吽といふか、祖父と祖母は素敵な組み合せだと思う。

最後に祖父のマッサージをしていた看護師に挨拶をして、そして病

院を後にした。

夜になり、そういえば夜勤を休む必要はなかつたと思いながら、ぼんやりと街を歩いていた。眠れなかつた。夜だからつて家に籠つているのがもどかしくて。

昼間の祖父の言葉は鋭く俺に突き刺さり、繰り返し遠雷のように耳に響いていた。

「甘えるな。言い訳をやめる。仕事をしろ。学べ。」

銀の砂子を山と盛つた白銀の器が、ぽつんと空に浮いている。まだ暑いつていうのに、まるで冬のよつに刃がくつきり良く見えた。

「信頼できる友を作れ。」

あの言葉は、どれも重たい言葉だつた。

思い起こすなら、それに比べて俺を護つていた殻のどれだけ薄つぺらなことか。

あの親父への憎悪は、自分を諦めるためにこれ以上無いほど、甘く優しい憎悪だつたことか。

「ああ、クソ。」

月が綺麗過ぎて、涙が出そうだ。

俺は、親父のせいで今まで何を取り落としてきたんだろう。

俺は、俺のせいで一体どれほどのものを見落としてきたんだろう。自己嫌悪に陥るのは安易なことだと思った。自分を不幸な人間にし、かわいそうな人間にして、諦めるのはたやすい。

「がんばれ、治。」

短い励ましだつた。

「がんばれ」

祖父のたつた四文字のコトバ。たまらず、涙が出てきた。マズイと思ひ脇道にそれで小さな公園に転がり込んだ。

視界が歪む。必死に視界を確保してベンチに座つた。

昔のことを覚えていない。とても痛かったこととか、衝撃的だつたことだけ、無人島のように記憶に浮いている。残りはただそれ

だけ。何時消えるのかもわからない。

でもそれを悲嘆するのは馬鹿馬鹿しく思えた。

気付かないフリをしていた。

親父を憎んで、心底絶望して、親父に似ていると思った自分を憎んだ。幸せになる資格なんてないと思っていた。夢を見るのも筋違いだと思っていた。

死んでしまえばいいと思っていた。

でも、いくら思い出そうとしても思い出せないじゃないか。

「クソ、馬鹿だな……俺。」

一人で暮らしていくうちに、憎い親父の顔をもう思い出せなくなつたじゃないか。

堰をきつたように涙が出た。

そうだ。憎んでいたのは、親父に似ていると思い込んだ、鏡に映る自分の顔だった。

もう俺を縛り付けていたものも、風化しつつあるじゃないか。

鰐張っていた力が抜け、体に染み付いたべたべたの毒が抜けていく気がした。

日付は随分前に変わった。丑三つ時にはだいぶ早いけれど、虫の騒がしい鳴き声は聞こえてこない。

しばらくして、やっと胸を突き上げられるような衝動が引いてきた。同時に、視線を感じて顔を上げる。

目の前には女の子が一人立っていた。みたところ、一つか二つ年下の世代だった。

「…なんだよ?」

「別に。」じたなとこりで即泣してる変なのがいるから何かと思つて。

」

ざわざわと風に騒いでいた公園の木々が囁く。

なんの衒いも無く言われたもんだと、目を細めて彼女を見上げた。

「おまえだつて……」

風が吹き、木の葉が揺れて白金のビロードが靡いた。うつすらと見えるその大きな目は真っ赤に染まっていた。目元もだいぶ腫れている。

「…」こんな時間に一人で何やつてんだよ。」

それよりも氣になることがあつた。兎のように赤いその目よりも、その眼の奥にあつた色が見慣れたもののように感じた。

全部を投げ捨ててもいいと思つてゐる眼。少し前の、鏡を覗いたときの俺の眼と同じ氣がした。

雰囲気も今にも消えそうな感じだ。まさに雲を食んで霞に住んでいるようだな、なんて思つ。

「ねえ、あんたさあ。モムマートでバイトしたことあるでしょ。死にたそうな顔してレジしてなかつた?」

くるりと体を回して、彼女は俺の横に座つた。自分で変なと称した男の隣に座るなんて、随分と可笑しなやつだと思った。

「私も死にたくてね。名前も知らないけどさ、むしろちよつといいから一緒に死なない?」

「はあ?」

「ほら、自殺志願のオフ会つて本名言わないらしいし。ちゅうどいいじゃん。」

笑つてゐるつもりなのか、彼女はくしゃりと顔をゆがめた。とてもそうは見えない泣いてゐる様な顔で。

俺、変なヤツを呼び寄せるオーラでも纏つてるんか？絡んでくるのは変態と変人ばかりだ。

「うざいな、お前。何がちょうどいい、だよ。俺を勝手に死にたがりにすんな。」

「嘘だ。モムマートの前通る度に死にたそうな顔してたの見たし。わかるんだって。だつて私も…」

昔からずっと、死にたいって思つてたんだから。

平均より少し小柄な体を更に小さく縮めて、嘯いた。

「お前喧嘩売つてんのか？俺は死にたくなんてねえよ。」

彼女から離れるようにベンチから立ち上がつた。「あ…」なんて俺を追いかけるように手を伸ばしかけ、彼女は寂しげにうつむいた。

「人恋しいなら家に帰れ。帰れば家族が居るんだろ？」

「帰れないし。家出しちゃつたし。死にたいし。あんな家に……居たくないし。」

「へーそりやタイヘンダ。じゃあ友達の家にでも行けばいいだろ。」

「家に泊めてくれる様な友達はいないし。」

「じゃあ諦めて帰ればいいだろ。」

「ヤダ。」

「駄々こねてないで帰れよ。」

「無理。」

心底、呆れてため息が出た。

までよ、なんだよこの状況は。名前も知らない他人と訳のわからない問答なんてオカシイだろ。

なんて頭の後ろの方で言つてる自分がいる。思わず苦笑がもれた。

「お前なんて名前？」

「……熊木くまき 倖音さちね だけど…何？」

「俺は多田治。名前知つて、これで一緒に死ぬにはちょうど悪くなつただる。」

彼女は、うう…と唸つてからずるい、と訳のわからない文句を言った。

「ああ、するい。」

「ちょっと、認めないでよー。」

彼女は小さく笑った。普通にしてれば、本当に可愛い顔をしていると思つた。

「ほら、笑えたならもう死にたくなんて無いだろ?」

彼女はきょとんとして、三秒。そしてまたするいと言つた。

「もう知り合つちまつたから、お前が死ぬと寝覚めが悪い。だから絶対に死ぬな。」

「でも……帰る家無いし。この時間にあんな家に帰ると殺されちゃうし。なら死ぬし。」

家に帰れないから『死ぬ』か。随分敷居が低くなつた。もうただの駄駄だ。

「つるせー奴だな。じゃあ……今夜はウチに来るか?」

カンカンと、赤錆びた階段を二つの足音がのぼる。

一体なんでまた、さつき「来るか?」なんて口走つたのか。今となつたらそれが自分でも信じられない。別に他意があつたわけじゃないくて、口をついて出てしまつただけだった。

階段を上りきつた狭い踊り場で振り返る。一段ほど下、後ろでは彼女がこっちを見上げて待つていて。

強いて言うなら、ほら、同属憐憫みたいなもんか……?

「行く。」と熊木は返事をし、それで困つたのは俺のほうだった。

俺は馬鹿か。

誘つた俺の馬鹿さ加減もかなりのものだけど、それにしても見ず知らずの、深夜の公園で号泣する変人についてくる熊木は俺に輪をかけて変態だと思う。

ある意味、無茶と言つか度胸があるのか……?

「なあ、なんでついて来たんだよ。」

「だつて、アンタが言つたんじやん。泊めてくれるつて。」

「……だつてお前、俺とつにさつき会つたばっかだろ。普通はもつ

ヒセ、警戒したりするもんじゃねえの？……夜に一人暮らしの家に泊まる、とか。「声が上ずりそだなんて氣付いて、無駄に低い、脅すような声になつてしまつた。

熊木はまたきょとんとしてから、おかしそうに肩を揺らした。

「何笑つてんだよ。」

「いや、だつて。……オオカミになるつもりの男つて、普通わざわざそんな事言わないでしょ。」

「それは……」

別にそのつもりで呼んだ訳じゃないけど、それにしたつてだらうが。月明かりの下じやなければ顔が赤くなつてゐるかもしれない。くそ、何だ俺は。

「それにさ、別にそりこいつの、もつぢつでもこいし。」

「……ああ、そうかよ。」

鍵を開けて扉を開く。乱暴に靴を脱ぎ捨て、玄関に入つた。電気をつけて声をかけると、なんだかんだ言つて、恐る恐る熊木は玄関を覗き込んだ。

「うわ、空き巣に入られてるよー。」

そして、一言。

「ふざけんな。これが普通だ。」

これ以上無いほどの悪態を天然で吐きやがつた。

「なんかさ、廃墟に勝手に住んでるみたい。ものすごく暑いし。」

「じゃあ野宿しろ、野宿。」

「あ、嘘、嘘です！立派で快適な邸宅です！」

扉を閉めにかかる俺に必死に抵抗して、熊木は必死に体を玄関に押し込んだ。

「ほら、マチユピチユ遺跡みたいな感じだし。」

「あれ兩ざらしじやねーか。」

ひとしきり熊木は失礼なことを言い倒し、けたけたと笑つた。唐突にへこんだり、そつかと思えば突然悪ふざけを口にしたり、感情の

出田が賽のように慌しい。

とりあえず、居間の方へと案内して予備のタオルケットを準備した。

「IJのソファー使っていい。空調は無いから扇風機で我慢しな。勝手に風呂入つていいし……冷蔵庫のものは適当に食つていいから。

」
熊木は渡したタオルケットを取り落とし、あわあわとそれを手繩り寄せた。

「う、うん。」

いつものようにシャワーを浴びて着替える。とりあえず予備のタオルも風呂場のほうに用意しておいた。

そして隣の部屋へ引っ込もうとする俺を、奇妙なものでも見る田つきで見上げた。

「なんだ？」

「なんか手慣れてるから……いつもこんなことしてるのかと思つて。」

「別に。ただ、俺の知り合いにはお前みたいな変人が多いんだよ。」

熊木は渡したタオルケットで、謙るよつに全身をくまなく覆い、丸まつた。

「……本当に、何もしないんだ。」

「そういうのに絡まれんの、めんじくせえんだよ。」

たしん、とまさに拒絶を表したような襖のしまる乾いた音が響いた。

それにタオルケットを取り落とすくらいう震えてたじやねえか。

ベッドに腰を下ろした。

空気が重い。水浴びしたばかりだつてのに全身に汗が浮いてきて、陸に打ち上げられた魚のような気分になる夜だつた。開け放つた窓から、二軒となりの家の風鈴の音色が幽かに聞こえてくる。

一機しかない扇風機を譲つた上に、居間との襖まで締め切つているから尚更だつた。寝室の小窓はすぐ隣のアパートの壁のせいであり風を送つてくれない。

「ねえ、まだ起きてる？」

しばらくして、襖越しに籠つた声が聞こえてきた。少しの間返事を

するかどうか逡巡し、返事をした。

「ありがとう。」

「別に何も。」

「私の家さ、早くにパパが死んじゃって、小さい頃から母子家庭でママには迷惑ばっかかけて。」

「……それで？」

「それで、私、早く仕事を始めて、ママに樂させてあげようつてばつかり考へてた。小さい頃から、お金を稼がなきゃ、早く仕事をしなきやつて。まあ、儲かつてもママが悲しむような仕事はするつもりないけど。」

静かな声だった。部屋の静寂が、言葉の余韻で余計に滲み込んでくる様な。

「高校に入つてすぐの頃に、入院するよつな怪我をしちゃつてね。それでその時お世話になつた看護婦さんたち……看護師さんか、今は。それに憧れて。それでさ、なりたいと思つよつになつたの。」

夢があるなら、捨て鉢になつちや駄目だろつこ。

俺は黙つて、続きを待つた。

「退院してそれからしばらくした頃に、ママが再婚したの。それも、公務員のお堅いバツイチオジサンと。そいつには私の二つ上の女の子の連れがいた。私と違つて、もうお嬢様みたいに上品で、品行方正の。……私なんかバイトバイトだつたから、部活とか出来なくつてさ。そういうところとかが向こひはイヤみたいで、なんだか仲良く出来なくつて。」

えへへへ、と言葉を誤魔化すように熊木は笑つた。それから、熊木つて苗字は前の苗字なんだけど。つて前置きを。

「なんかさあ、ママのためにつて今までお金だ、バイトだつて思いつめてきたものを全部、オジサンが持つて行つちやつて。一番強く繋がつてると思つてたママとさえ、なんか距離できちやつたみたいで。」

すんすんと、鼻をすするような音が聞こえた。

「……まだ起きてる?」

「ああ、ちゃんと聞いてる。最後まで聞いてやるから、全部吐き出しちまえよ。」

俺には熊木が思い悩むことを軽々しく、とやかく言つことなんて出来ない。

それでも後腐れのない一晩かぎりの独白の相手には、なつてやれるだろうと思つた。

「うん…。それで、ママは少しずつ私に、お姉ちゃんのようにしつかりしなさいって言つようになつた。きっと、頭の固いオジサンに私が嫌われて、私を育てたママまでオジサンに嫌われちゃうのが怖くて。私が何をしても、私じゃなくてオジサンと、オジサンの娘ばかりを見るようになつた。」

熊木の声が、湿っぽい。それでも、裸越しの声はお互ひの距離関係にちゅうどいい優しさだつた。

泣き声交じりに熊木は続けた。

「私は看護師になりたいってママに言つたんだけど…。そしたら、お父さんがお金を出してくれるからちやんとしたいい大学に行きなさいつて。……だからさあ、私必死にバイトして少しでもたくさんお金ためて、それ以外だと一生懸命看護学校に入れるように勉強して、今までやつてきたの。」

少し、というかかなり驚いた。

初めて眼を合わせたときに、まるで自分の目を見つめているようだなんて思つたけれど…。状況こそ違うが熊木は俺に良く似ていた。

「今日、ママが本気で怒つてね。大喧嘩して…。産まなきゃ良かつたって言われちゃつて…。もう私を助けてくれる最後の気持ちの糸が切れちゃつた気がして。歩き回つてあの公園で泣きそうになつたら、後からふらつと来たあんたがびっくりするくらい号泣してやあ。…。それも私が泣くのを忘れるくらいの勢いで。」

泣きそうになつたら、か。

見上げた天井は暗く、いつもの様に染みが踊つていた。

「だから、声かけたくなっちゃって。あんたのこと見たことあつて覚えてたし、全部どうでもいいやつてなつた私と一緒に死んでくれるかなあつて。」

「そんな……」

馬鹿なこと、とは言えない。ほんの数ヶ月前の俺が今夜のような誘いを受けたなら、きっとそれもいかつて思つていたかもしない。俺だつて少し思い立つて、橋の手すりの向いの側に立つたなら、きっと飛んでいたんぢやないのか。

「……それしかないのかよ。夢を見て生きるよりも、ただ死ぬ方が良いのか？」

今度は熊木がしばらく黙り込む番だつた。

「今まで必死に勉強した分も、必死にバイトして貯めた金も、それはお前が自分のために頑張つたものだる。それも全部信じられないつていうのかよ…。それだけ頑張れる看護師の夢自体、そんなに簡単に諦められるものなのか？」

はああ、なんて長い深呼吸が聞こえた。

「だからさ、あんたが私と死んでいいつて言つてくれたら……そうじやなくともあんたがこの部屋で私を滅茶苦茶に汚してくれたら、一人でも死ねるんぢやないかつて思つたのに。するいね、私……。しばらく、熊木はしめしめと泣いた。どれくらいの間だつたのかわからない。瞬り上げる声も聞こえなくなつた頃、声をかけた。

「これからどうするんだ？」

返事は無い。眠つてしまつたかもしぬない、と思つたけれど…。

「もしこれからバイト増やして、一人暮らしのアパート探すんなら……しばらくこの部屋半分貸しても…いい。」

雄一のいつかの言葉か、裕子さんの言葉か、祖父に言葉を貰つたからか。

理由はつけようと思えればいくらでもあるし、無いといえば無い。あえて言つなら、ふと、熊木が俺と似てゐると思つてしまつたから。あの一人暮らしのときに、祖父母が手を差し伸べてくれたようにし

てやりたいと思つたからか。

「俺にも……バイトでアパート借りて苦労したつていう馬鹿な知り合いが…居るからさ。」

泣きつかれて眠つてしまつたのかもしれない。やはり返事は無かつた。

静かな部屋の空氣に打ちのめされ、また随分突飛なことを言つちまつたもんだと反省して体を横たえる。寝苦しかつたけれど、横になつたとたんに緊張の糸が切れたらしい。すぐに睡魔が襲い掛かってきて、負けた。

朝になつて、わいわいとやたら騒がしいのに気が付いた。時計を見たら九時過ぎ。五時間くらいは寝たのか。

重たい体を起こして、襖を開く。

「おはよー治。」

「おはよー。」

あつけにとられたというか、なぜそういう可能性を考えなかつたのか自分の浅慮を加減に呆れた。

うるさかつたのは、熊木と裕子さんが楽しげにおしゃべりをしていたからで。一人して楽しそうに寝ぼけた俺に手を振り上げた。

「治も隅に置けないねー、こんな可愛い子を部屋に連れ込んでー。」

ふふふ、なんて口元に手を当てて笑つてる裕子さん。

「何を勘ぐってるんだか知りませんけど、そういうんじやねーですから。」

「照れちゃつて…んまー。」

やたら声高に俺のことを煽つてくる。いつは現状をどうするかで頭の中がぐつちゃぐちゃだつてのに。

「昨日のあの言葉は嘘つてこと?」

熊木はきょとんとこいつを見上げた。だからそんな眼をするんじやないつて。

「何? どんなことになつてたのー?」

「一緒に住もうつて。」

「つんなこと言つてねえ!」

キヤーなんて歎声をあげる裕子さんを押しのけた。

「もしならこのアパートの半分貸すつて言つただけだろがー! そもそもあれお前寝てたんじやないのかよ! ?」

押しのけられたままの裕子さんの歎声がちらに半オクターブ上がる。

「あ。」

手足をばたつかせ大歓声の裕子さんを見て遅ればせながら気付いた。今の俺の言葉、最悪に逆効果だ。……眩暈がしそうになつた。

「……出掛けたから。」

これ以上問答して必要以上に自分を追い込むことはないと無理に納得。逃げるようだと思つたけれど、実際に逃げの一手段だから仕方ない。

「治？ 昼間からどこに行くの？ たしか今夜もバイト休みでしょ？」

「ハローーワーク。」

「あ、何なに？ 治つてば就職するの？」

これまた興味津々といった具合に裕子さんは身を乗り出した。

「まあ、いい加減そろそろ。」

言われて決意するなんて随分簡単で、情けないと思つたけれど。でもいつまでも安っぽい意地を張り続けて馬鹿を見続ける方がよっぽどアホらしい。

キッカケはなんにしても、決めたのは俺自身だし。

「ふふふふふ、キッカケはさっちゃんつて訳ね？」

「え… そうなの？」

なんだか訳のわからんことに照れたような顔をする熊木。それに、あの一件以来少し意地が悪くなつた気がする、悦に入つた裕子さん。「違う。全然断じて違うから。」

「違う… の。」

なんだか熊木はがっかり肩を落とした。

「いや、普通違うだろ。何がっかりしてんだよおまえ。」

「まあまあさつちん、何かと可愛い治の話をしてあげるから機嫌直してー。」

「は、はい。」

「はい、じゃねーー裕子さんも変なこと言つてやめてくださいよー。？ マジで怒りますからね。」

鞄を引っ手繰る様に取り、肩にかける。女三人寄ればかしましいつ

て、二人だつて十一分だつて。

「畜生お……じゃあ行つてきますから、裕子さんは適当にすばやく帰つてください。」

「あれえ、さつちんはいいんだー？」

もう聞こえなかつたフリで玄関から駆け出した。これで雄一が来たらどういつ騒ぎになることか。

頭痛がするほど頭が重く感じた。

しつこかつた残暑もやっと落ち着いて、秋を越え冬になつた頃。予想通り雄一がはじめて来た時には熊木を見て号泣した。額面びおりホントに号泣した。

「お前はそんなやつじゃないと思つていた。」つて今まで生きてきて聞いたことも無いほど恨めしい声で。状況を説明するのに尋常じゃないほど骨を折つた。

熊木はというと、昼間は高校に通い夜は十時までアルバイトの日々、帰つてきたら遅くまで勉強。俺はというと深夜バイトで、昼間はハーフワークにいつては面接や試験。

休日は昼間か夜に顔を合わせて話をしたけれど、完全に生活のリズムはずれていた。

休日になれば例によつてあがりこんでくる裕子さんや雄一と、熊木でなんどか遊びに行つた。

映画に行けば、シリアルスなシーンでなぜかツボに入つて笑つたり、少し泣かせる映画だと周囲に迷惑がかかるほど大泣きする。これには俺も、雄一も、裕子さんでさえ困つた。

結局映画は家の鑑賞会がメインになるくらいだった。

カラオケに行つたら、熊木は驚くほど音痴だった。

俺も人のことをいえるほど巧いのかと言わればどうかわからないけど、これは困つた。

なんせ、今まで雄一にしても裕子さんにしても異常なほど巧い部類だつたから、そんな時になんて声をかけばいいかわからない。熊木は俺の隣に座つてうれしそうに歌つて小さく踊つて、ノリノリだつた。雄一も裕子さんもノリノリだつた。俺だけ耳もしくは脳がイカれてるのかと思うほど。

「どうかな治ちゃん。」

熊木は覗き込むよつてこつちをみてきて。その向こうでこれ以上無

いほどにいやかに、かつ眼の奥にギラリと光をともした裕子さんが見えて。

「まあ、……結構いいと思つぞ。この曲はかなり好きなんだ。」

「ありがと治ちゃん。」

熊木はへにやりと笑つて首を倒して見せた。

こつちはというとぐつしょり冷や汗をかいていた。

なるほど、いつも時つて裕子さんや雄一みたいな素で巧いやつには「上手だ」って言つて、そうじゃなければ「いい歌だ」とか「この曲が好きだ」って言えれば相手が傷つかないのか……？

まあとにかく、なんだかんだで熊木はうちに住み着いた。雄一とも裕子さんともうまくやれているようで、それは本当に良かつた。

それからまたしばらくして、何本も面接したりなんだりして、最終的に引っ掛けたのは中堅どころの警備会社だった。

正式な入社としては時期がおかしかつたが、欠員が出たための警備士募集だつたとか。

身辺調査の結果、忌々しくはあつものの親父が警察官である」と、それとお袋が元婦警であり、今は交番相談員をしているのが決め手になつたようだ。

祖父もちょうどこの頃に退院して、自宅で療養しているらしい。改めて報告と挨拶にいかなきやだと思つ。安心させておかなきや駄目だと。

深夜に、営業を終えた会社や学校などを巡回したり、二十四時間体制で市役所のような場所を常駐で警備したりする仕事だつた。

越野家の店長は、貴重な戦力が減つてしまつたとやたら俺を持ち上げて辞めさせまいとした。

まあ無論、決まつたのでやつぱり辞めますといつたら残念そつだつたものの、しかし祝福してくれた。

話を聞いたら、この越野家も就職が決まつた『太陽総合警備保障株式会社』の警備物件だつたらしい。

そういうえば深夜に頬に傷持つ系のホンショクが来て、越野家で暴れまわったときに警察と一緒に来たのは太陽警備の警備士だった。

支給された制服をみて思い出したが、早朝によく弁当を買いに来ていた人もいたし。

警備会社、それもソーケーとか、アルソックと違つて中堅どころだから尚更なのか、配属された巡回機動隊には一匹狼のような人間が多くつた。

軒並み年上で、しかも一番歳が近くて六歳以上という今まで付き合うことが無かつた世代だった。

仕事的には夜、深夜、早朝の巡回をこなし、その合間に契約物件のセンサーが何か異状を察知したら中央管制を経由して連絡が来る。それを確認するといった仕事だった。

全身を紺一色の制服と紺の帽子で包み込み、警棒を腰にさし、毎晩人のいなくなつた建物をみて回る。

正直、一匹狼が増えるのもわかる気がする。言つてしまえば基本はすべて自分でやらなきやならない個人プレーだ。

向こうもこつこつにどう絡めばいいのか図りかねているようで、それにつちから話しかけるにもなんだかきつかけをつかみにくかつた。仕事については問題なく教えてもらえる上に、いざ巡回を開始すればすべて一人でやる仕事だ。なにかが噛み合わない様な感はあったものの、しばらくしたら仕事にはだいぶなれた。

暖冬だつたため、あまり霧が出ないで学校などに設置された外周部の赤外線も誤報を出しにくいし（ルパンとかがやるように、霧や煙の中でも赤いラインは見えなかつた）雪が積もつて巡回に使う車が往生することも無い、いい年だと隊長はしきりに言つていた。身長が百九十にもなる和入道のような人、それが隊長だった。

しばらくたつた、年末が差し迫つた頃、深夜巡回中に携帯がなつた。家の電話からで、出てみると震えきつた泣き声の熊木だった。

「どうした！？」

たっぷり時間をかけて、震えた泣き声で途切れ途切れに返事が来た。
「外の階段を誰かが上ってきてドンドン扉を叩いて……鍵をかけて
たけどノブをガチャガチャして……怖くて……」

「少し……待つてろ。」

年末年始には中央管制から警報が出たら氣を引き締めろ。本物の泥
棒とかが良く出るからな。

そう隊長が言つていたのを思い出し、とにかく、巡回も放り出して
すぐに会社の車を飛ばした。

電話から五分ほどで家に着いた。すべての部屋のカーテンの隙間か
ら光が漏れている。テレビの音が下まで聞こえてくるほどの音量に
していいるようだつた。

すぐ周りを見て回つて、誰も居ないことを確認した。特に壊され
ていた場所はないし、変質者らしき人影も見えなかつた。

隣近所や一階の住人に、今まで挨拶くらいしかしたこと無いのに話
を聞いた。どうやら近所の住人たちは気付いていなかつたらしい。
「凄い大音量でテレビを見ているからどうしたのかしらと思つてい
たけれど、それならしじうがないわねえ。」

隣の愚痴つぽいおばさんも最後に、氣をつけなくつちやね。なんか
あつたなら頼つてくれていいわよ。なんて言つてくれた。

階段を上がつて鍵を開けた。ドアノブを引くとチヨーンがかかつて
いた。

「熊木大丈夫か？」

「お、おざむちやーん」

バシャーンなんてすさまじい音をさせて襖を開け放ち、熊木は俺の
布団に包まつた状態で芋虫みたいに出てきた。
ボロボロに泣いてるのに、なんだか緊張感がまつたく無い。

「とりあえずチヨーンはずしてくれ。」

「う、うんー。」

布団に包まつた芋虫のまま玄関をズリズリ這つて来る。

……ああ、俺の布団が砂だらけだる……。

あまりの緊張感の無さにそんな自己中な考えまで一瞬脳裏によぎった。チューインをはずして抱きついて来た熊木の震えに気付くまでは。改めて抱きつかれて気付いた。

熊木は小柄な女の子だった。

初めて会つたときから、おかしなやつだと思っていたし……死にたいだの死ぬだの口に出してはいても、どこか失礼なやつで、そのくせ芯が強いやつだと思っていた。

熊木はすさまじい勢いで泣きながら、凍えきったように体を震わせていた。わんわんと泣きながらも口元がだらしなく緩んで見えるのは、多分安堵からだろう。

「……もう大丈夫だ。」

今まで思つていたよりあまりにも頼りない熊木が、その体が、このまま放つて置いたら碎けてしまいそうな気がした。壊れ物を扱うよううにそつと抱き、頭をぽんぽんと撫でてしばらくの間大丈夫だ、と繰り返し言い聞かせた。

どれくらいの間かわからない。五分か、十分か。それよりずっとなのかもしれないけれど、やつと熊木の震えが落ち着いてきたとき、制服の胸ポケットの中で機動隊員連絡用の携帯がけたましく鳴つた。携帯を開くと、中央管制からだつた。

巡回で物件に入るたびに警備の解除信号とセット信号を入れる。それによつて今どこにいるのかを中央管制は把握するらしい。その信号が途絶えたせいで、連絡を入れてきたんだろう。

どうしたものかと視線を泳がせ、そしてそれを下ろした。

熊木は代わらず俺の胸をビショビショにしたまま、顔をうずめている。

ピリリリリ、なんて携帯のコール音がこれ以上無いほどやかましい。逡巡していると、きつちり俺の背中に回されている腕が、少しだけ強く胸を締め付けた。

「わかつたつて。」

携帯に出る。運よく、というか、じつじつ話が一番通じそうな隊長

からだつた。

「いまどこにいるんだ？何か問題でもあつたか？」

顔つき体つきは和入道なのに、少し甲高い独特な声。安田大サークルの黒ちゃんほどじやないけど、隊長も凄いギャップだ。

言葉を選んで、問題がなさそうな言い回しに変えて、「家の近辺に変態が出たらしくて、家に待たせていた連れが怖い目にあつたらしくて、巡回中なんですけど一度家に来ています。」といった内容を伝えた。

すると隊長は「じゃあ待機室空けるように言つから、今晚は一緒に来れば良い。栗橋には車両待機を頼んでおくよ。」といつてくれた。夜、深夜、早朝の巡回の合間数時間、仮眠を取るための待機室を空けてくれるらしい。

「ありがとうございます。準備が出来次第連れをそつちに届けて、また巡回を続行します。」

「気にしなくていいぞ。明日朝にでも栗橋に一言言つとけば大丈夫だから。」

「はい。」

もう一度お礼を言つて携帯をきつた。

それから準備をするにも着替えるにも電気一つ消すのにすら近くにいないと怖いとかでさんざん手間取つてから、やつと車に乗つた。車のライトが届かない道端の闇の中に、こつちをみている人間がいる気がして怖いと、熊木はまた体を縮込ませた。

「大丈夫だつて。」

頼りなくシートベルトを握り締める手を、そつと握つた。ひやりと冷たく感じた。

「治ちゃん、手暖かいね。少し硬いけど、なんか落ち着くし。」

「よく世間で言うみたいに、心が冷たいからな。」

「嘘だよそれ。手が暖かい人は心が暖かいんだよ、きっと。」

「へえ、熊木は手も心も冷たいやつなんだな。」

「……やっぱり手が暖かい人つて心冷たいんだね。」

ふふふ、なんて熊木はやつと小さく笑つた。

「知るか。」

「ちょっとそれするいし。」

十分ほどそんなやり取りをしながら車を走らせると所属している太陽警備支社についた。車から見上げて、熊木は「ぼろい建物だね。」といつから俺んちに来たときみたいな文句をたれた。

「やがましい。四十年くらい使つた建物だから、もう少ししたら引つ越すんだとわ。あとそういうのすぐに口に出すのやめろ。」

「へえー。」

タクシーの会社みたいに設置されている、巡回車専用駐車場に車を止める。手を引いて待機室まで連れて行つた。

「なにも無ければ一時間しないで巡回終わるから、テレビ見てもいいし、寝てもいいからな。なんかあつたら携帯に電話しろな。」

こくこくと頷く熊木を確認してから、管制室へ移動した。

隊長は「嫁は大丈夫だったのか？」なんて心配したような、でもどこか皮肉っぽい顔をした。

「嫁じゃないです。」

念を押して、あとはおおむね大丈夫だという話をしたら、隊長は待機室に嫁を覗きに行こうか、なんていいだした。

「隊長、今あいつびびっちゃって敏感になつてるんで……隊長がいくと怖がつて大泣きすると思います。やめといてやつてください。」隊長は目をむいて、今まで見たことない顔で俺を凝視してきた。しまつた、地で妙なこと言つちまつた。隊長は良くなしてくれたつてのに、こんなときにはねくれたことを……。

「すいせ…「うわはははははは」

謝らうとしたが、口の謝罪を遮つて歪な鐘を叩きまわしたみたいな聲音で隊長は大笑いしだした。

今度は訳のわからなさにあつけにとられないと、隊長はひいひい言つて呼吸を整えてから座つていた椅子から身を乗り出す。

「いやいや、どうにも最近の若いのはとつつきにくくものだと思つ

てたが……なかなか言つじやないか。」

「すいません。失礼なことを…」

「違う違う。それくらい言えたほうがココじや上手くやつてけるつて話しだ。如才の無い若者なんてつまらないのや。それが地か?」

「……まあ、はい、たぶん。」

また豪放に隊長は笑つた。

「いい性格してるじやないか。俺は好きだぞそういうの。」

「はあ、……あらがとうござります。」

「ん~またか?」

「あー……デートの待ち合わせは明日の朝で良いんですか?」
もう何がおかしいのかわからなくなってきたけど、隊長はおかしそうに笑つていた。

「堅苦しいのは締めるべきときと上司にだけで充分だ。支社長とか、常務とか、所長とかな。そういうキャラは今までいなかつたから貴重なんだ。」

栗橋なんか自称Mだから喜ぶぞ?なんて付け足した。

「しばらく栗橋さんには猫を被らせて頂きます。」

そんなやりとりをしてから、会釈をして改めて御礼を言つた。

「安心して張り切つて行つて来い。」

笑う隊長に任せ、車に乗つて途中から巡回を再開した。

巡回が終了して、待機室に戻るとテレビも蛍光灯もつけたままで熊木は眠つていた。

音を立てないように警棒などをはずし、テレビを消してもう一つの布団にもぐりこんだ。

蛍光灯はそのままにしておいた。

明るくて眠気が来ないどころか、そういうえば襖一枚さえ間に挟まずに同じ部屋で寝るのはこれで初めてだつたせいで……熊木の安定した寝息が、気になつて目が冴えるばかりだつた。

それからしばらぐ、巡回中の空き時間には家に帰つて夕飯を食つたり、ちよいと顔出すくらいの寄り道を頻繁にするようになった。あれ以来変質者らしき人間と言つのが来た形跡は無いらしい。念のためにアパートの入り口に、貰つた太陽警備のステッカーを猛獣注意みたいに貼つておいたのと、俺が結局制服で頻繁に寄るもんだから、本当に警備してるとでも思つたんだろうか。

仕事では、これはちよどいと熊木のことでいじられるようになつた。そんなこんなでいろんな話に参加するようになつた。仕事で、今まであつた違和感。奥歯に何かが挟まつたみたいな噉み合わない感じは無くなつた。とはいっもの、熊木に関してとやかく言つるのはやめて欲しかつた。

なんつーか、こつ。

まあいいか。

警備の仕事はつまり普通の会社が休みの日にこそ忙しくなる仕事だ。そりや当然で、会社員がいる時間帯よりも無防備な夜や休日こそ泥棒が入るんだから。

だから、今年は年末からほぼ缶詰のよつた状態で年を越していった。頻繁に帰つてはいたけど、熊木が一人だらうつて裕子さんや雄一が来てくれていたのには本当に助かつた。

まあ、多分宴会とか、つまり酒飲みの口実が欲しかつたんだろうとは思うけど。

一月も半分が過ぎてやつと纏まつた仕事がもらえた。とりあえず、巡回中にサボつて近場の小さい神社に一人で初詣には行つたものの、一度は祖父に挨拶に行かなきや駄目だろうと思つた。

前もつて連絡を入れると、祖母が出て、「いらっしゃい、いらっしゃい、お母さんたちも呼んでおくわ。」と例によつて甲高い声で歌うよつにいった。

それで、さあ行こうと準備をすると、熊木がやたらとついて来ただつた。

えへへへと笑っていたが、それがどういう意味なのかわかっているとは思えなかつた。

とりあえずいろいろと説明して無理だといったものの、あれやこれやと問答をした結果結局車から降りないといつ条件でついてくることになつた。

なんせ、泣き真似まがいの演技まで使つてきたから、まんまと騙されて折れた形だつた。

制服を着て、上にコートを羽織る。警備の腕章と胸の紋章が見えなくなるせいで、工場の作業員のつなぎのように見えた。

三十分ほど車を走らせて、祖父母の家にたどり着いた。降り際に「本当にたのむから。」と熊木に念を押して、家に上がつた。

祖父は会社の経営を智恵理叔母さんに任せたらしく、コタツに足を突つ込んだまま横になつていた。二つ隣の部屋から伸びた長い長いチューブが、やはり鼻から肺に入つていた。

だいぶ遅れた新年の挨拶を済ませ、就職報告をしてコートを脱いだ。祖父は体を起こして目を細めてた。そして、「安心した」と少し泣いた。祖父は涙もろくなつたと思つ。

仕事はどんな具合なのかなと少し話をしてから、連れを待たせているからと腰を浮かせたとき、お袋と妹が来た。なぜか一緒に熊木がいる。

「久しぶりね治。」

お袋は少しだけ瘦せたようだつた。静かに俺の制服姿を見て微笑んだ。

「車に彼女待たせつぱなしつてどうかと思つ。」

有理はとつて、なんとも言えない意地の悪い笑みをこぼしながら、俺と熊木を交互に見つめている。

「これは、しようがないよね？」

熊木はまるで自分の白が八割の陣地を占めていて、さらに四隅も押

さえたオセロでも前にしたみたいな顔。

ああ、こんな気がした。だから無理だつて言つたんだ。

「い」挨拶が遅くなりました。治ちゃんの家でお世話になつている熊木偉音です。あけましておめでといいぞいきます。宜しくお願ひします。

す。」

しゃなりと座つて、三つ描なんかついて熊木はペコリと礼なんかしてやがる。

「まあまあまあ。」

「治。」

ぽんと手を合わせて声を上げる祖母を遮り、静かに祖父が名を呼んだ。

「トヨジ、……なんだい？」

でも、ゆつくりと振り向くことしか出来なかつた。その静かな声はあの時のように……いや寧ろ退院してゐるぶん、あの時よりも激しい暴風をソフトボールに無理矢理詰め込んだような圧力の声だつた。つい今しがた、安心したと涙を流していた祖父はこれでもかと無表情な、でも最近やつと感情を見て取れるようになつた俺の目からしてもつとも厳しく見える無表情でもつて、背筋を伸ばした。

それで、一時間ばかり説教された。

結局それで開放されたらどこへ行くでもなく家へ帰つた。熊木はなにか上機嫌だつたけど、こつちは氣をもんで神経をすり減らすばかりだつた。

春。

熊木が念願の看護学校に受かつた。何かと問題は多かつたらしいもの、どうしたのかとたずねると「何とかなつたし、まあいいでしょ。」としか言わない。

ふと、俺は熊木のことを何も知らないじゃないかと思つた。知つてているのは、熊木が家出をするに至つた経緯だけだ。ふと、ついこの間祖父に詰問されて困つたのを思い出した。

そんな俺の顔を見て、熊木は苦笑した。

入学金で二十万円ほど。年間で百万円弱だなんて言つていた。わかつていたけど今まで貯めたお金の大部分を持つていかれちゃつた、と。

でも、すぐに嬉しさに綺麗に破顔しなおす。

「治ちゃんにお世話にならなかつたら、五年ぐらゐお金貯めなきやだつたよ。ホントにありがとね。」

「別に。」

昔から素直に感謝とかされるのがいまいちむず痒くて苦手だ。

適当に切り返したら、なんだかわかつたよつてくつくつと熊木は笑つた。

「何笑つてんだよ。」

「べつに。」

……苦手な空氣だ。

貯金をほとんど使つちゃつた……つて。頼られたつてこと、か。

……別に、嫌ではないけど。

まあ、熊木から話さないなら、わざわざ根掘り葉掘り聞かなくてもいいか、なんて思った。

看護学校の教科書は異常に多かつた。横幅三十五センチ、奥行き一十

センチの三段本棚がほぼ埋まるくらいの量だ。一年目、二年目には学科的なものをぎっしりとこなして、三年目は実技的なものを習得するらしい。教科書を買いについていき、それを運ぶ役になつた俺は、舐めていた分その量にずいぶんと驚かされた。

勉強の内容も複雑だつたらしいけれど、話を聞く限り学校は楽しそうだつたし、なにより生き生きと目を輝かす熊木を見ているだけで、安心できた。

このころから、有理までうちに上がりこんでくるようになつた。このときになつてやつと知つたことだけど、有理も看護師になりたいらしい。

今、彼氏が今年から自衛隊に入隊した俺の一つ年下で、そのお袋さんが看護師として働いているらしい。

結婚を考えているとかいい、向こうの家に何度もお世話になつたとか。親父がお袋に当たるのを見て、自分はそれを口実に彼の実家に転がり込んでいるつてだけみたいだけれど。

有理の彼氏、谷口 宏道のお袋さんと親父さんは有理のことを気に入つたらしくて、よくしてくれるとか、どうとか。

今のうちから、看護学校に受かりさえすれば、谷口のお袋さんの病院の援助で学費を免除してくれるとか何とか、そんな話をしているらしい。

それでこの前の、正月の一件以来メールのやり取りなどをし始めたらしい熊木と有理は、いつの間にか仲良くなつていた。

熊木が看護学校に入学したのをキッカケに暇さえあれば看護学校の話や何かでうちに上がりこんでくる。

熊木は熊木で、口が軽い有理からいろいろなことを聞いたらしくて……ずいぶん、有理の頭と口の軽さには嫌気がさした。

熊木経由で実家の惨状が俺の耳に入つてくるのが、たまらなく耐え難かつた。

卒業から一度目の夏になつた。

初めはハードな看護学校のスケジュールについていくのがやつとだつた熊木にも余裕が出来てきたりしい。バイトも安定して組んでいるようだし。

休みがあつたときなんかに、何度か、みんなで車を飛ばして海や「テイズニーランドなんかに遊びに行つた。

この頃になると、雄一はあまりあがりこんでこなくなつた。

一年間の養成学校の卒業公演に向けての訓練だとかでいろいろなところを駆けずり回つていた。プロダクションの面接や試験も何度も受けに行つていたらしい。

養成学校の講師の一人、名前は忘れたけど火曜サスペンスみたいな番組の中堅俳優に酷く気に入られたらしくて、それに順当に実力をつけることが出来ているらしくて、本当にたまに顔を合わせると随分と印象がコロコロとかわつた。

俺の知つている雄一は変態で変人だつた。

それが、その方向性に自信を持つた変態な変人にドンドン進化していきやがる。
応援したいのは山々なもの、どうにも、違和感が強くなるようだつた。

嫉妬というにはあつさりしている。なんとも説明のつけがたい、凡庸な俺と離れていく雄一の違いへの焦燥だつた。

一年目の夏と違つて比較的涼しい夏だつた。

熊木は俺以上に暑さに強い性質で、別段扇風機があれば充分だとうやつだつたし、俺もあえて今年は空調を買わなくてもいいかと、団扇片手に過ごした夏の終わり。

いよいよ具体的に有理の進路の話が固まつてきたりしい。

俺の中じゃ、昔から勉強とかないがしろで、いつも十段階で四とか三をとつていた記憶しかない。そんな有理が果たして現役で看護学校に受かることが出来るのか、はなはだ疑問だつた。

しかも、この夏の時期になると行軍があるとか、どこかの駐屯所に

行くとかで谷口が遊んでくれないと、ショットをうつすらと壁をしているようだつた。

有理自体、酒飲みにはやはり苦手意識があるらしくて、自衛隊の先輩にしようつちゅう連れ出されてベロベロに酔つて帰る谷口に不信感を募らせることが多かつたらしい。

うちに来るたびに、愚痴ばかりをこぼしていた。

高校でも続けていた柔道部の関係者で、整体方向の資格を持つおじさんがいたらしく、有理はそつちの派生方向から看護師の資格取得の誘いを受けていたらしい。

けれど、谷口のお袋さんのほうの誘いを断ると谷口との関係にあまりよくなないんじゃないかと、蹴つたんだと俺に笑いながら言つた。単純にどうしたいとか、どっちが楽しそうだとか、楽そうだとか、そんな基準で自分の身の振り方を考えるところはまったく変わつていいない。

やはり、そういう甘さが、どうしても好きになれなかつた。

熊木はなんだかそういう俺の様子をどこかで察していたのか、俺の有理の間に入つていてるようになつた。

事実、有理の愚痴は、大半を熊木が聞いて、その中で近況はどうだとかいう情報を間接的に俺に話していいた節がある。悪いことをしたと、いつも思つていた。

俺は、それこそドライに有理の現状を見ていた。

たとえば俺が、そういう時はどうした方がいいだらうと口出しをする。

「つるせーよ。自分の好き放題やつてきてる兄貴にとやかく言われたくないって。」

そう、返事をして一切耳を貸さないやつだから、尚更だ。

この頃は、たまに無理矢理引っ張つてこられた谷口と、我が家で夕飯を食べたりした。

積極的にセッティングしたのは熊木で、単に料理することが好きな俺に腕を震わせるためだとか言つて。

いくらなんでも、完全に無視をするわけにもいかないから、なんとか娘の彼を迎えるようななんとも居心地の悪い食卓の場を提供する羽田に、何度もなつた。

自衛隊員として、五厘刈りの薄ら青い坊主頭。右耳は熱で変形している。もともと有理とも柔道部で知り合つたらしいから、寝技のときには激しく畠に擦り付けたんだろう。

変形こそしなかつたけど、俺にも経験はある。治療に耳の軟骨に直接注射をうつのはすげえ痛かった。

目は切れ長の釣り目で本当に細い。頬骨が出張つた顔立ち。格闘家として厳しい鍛錬をして、顔をシャープにした雄一のよつにも見える。

悪く言えば、それほど器量良しではなくて、やや人相は悪い。

ディフェンスが苦手なボクサーが試合後に顔を腫れさせたような感じだ。

こつちからいろいろとぎこちなく話しかけるもの、なんだか人見知りをするように曖昧な返事ばかりが返ってきた。

間接的にとはいえ、あまりよくない話ばかり耳に入るせいで、どうにも印象は悪い。話は進まない。

「谷口君、なんだか治ちゃんのこと怖がつてたよ。観察されて緊張したんじゃない？」

解散した後、熊木は笑つた。少し責めるような声だった。

「治ちゃんつてば、ガンコオヤヂつて感じだつたし。」

「俺は人見知りするんだよ。それに、有理の愚痴ばっか聞いてるからどうにも。」

「初対面で家に私を呼んだのに？」

「……変人は別なんだよ。」

「酷いねー。私も有理ちゃんに愚痴つちやおうかな。」

熊木は逃げるよう居間に。そしてぱたぱたとせわしなく食器を持つてくる。台所で洗い物をするのは料理を作つた俺の役目だった。

「好きにすればいいだろ。」

思つた以上に投げ捨てるような声が出た。熊木は「まつたぐ。」なんて口を尖らせて俺の肩を叩いた。

「たとえば洗濯物を洗濯籠に入れないと、本を読んでも私が話しかけても気付かないとかで、折角つくつたピーマンの肉詰めのピーマン残すとか、そういう愚痴つて女の子は誰でもいるよ。」

「どうですかでそういう事言つか。へえ、そうかい。」

「怒らないでよ。だからわ、有理ちゃんの愚痴つて、聞いてるこつちがアチチチつてなるし。もう少し谷口君と有理ちゃんのこと、優しく見てあげたら？」

「別に厳しく見てるつもりは無いけど。」

「けど、優しくも見てあげられない？」

熊木は困つたように、柳眉をゆがめた。

「お前が気を使う問題じやないよ。」

「そういうわけにも、いかないでしょ。」

いつからか、熊木は俺の先回りをするようになつた気がする。

自分でも、わかつてゐはずだった。でも、いつだつて俺は一つずつ納得して落ち着けないと、折り合にをつけられない性分なんだらうと思う。

おざなりと、広く浅く上手いことやつてこいつとお気楽な有理のことは、今ひとつ心情的に許せない部分があるのは、昔からだ。

「有理ちゃんもさ、一生懸命やつてるよ？勉強はもちろん、この間なんか体力測定で女子の部、学年総合一位だつたんだつて。」

「へえ。」

傍らで沸かしていた薬缶の湯が沸騰して、ピイピイわめく。熊木が止めて、紅茶を入れた。

「文武両道つてさ、凄く大変だよ。見えにくいけど、有理ちゃんは頑張つてゐんだと思つ。」

そこまで言つて、今日は観たい映画がやるんだと、熊木は紅茶をテレビにならべてテレビをつけた。

「ねえ、ほら。今日はジャッキーの醉拳だよ。」ひさ座つてゆつく

り観ようよ。」

熊木は猫の刺繡が入った座布団を引き寄せて、ぽんぽんと叩く。

「……わかったよ。」

水周りを綺麗にしてから、エプロンを脱いだ。座ると、ジャッキー扮する青年の厳しく頑固な父親が、薬を処方しているシーンだった。

秋になつて、お袋から連絡があつた。正式に、親父と離婚を決めたらしいつて。

以前から聞いていた話だつたから、それほど衝撃は無かつた。ああ、やつと離婚して落ち着けるようになつたんだな、と思つていた。でも、そのメールが来て次に有理がうちに来たときにその話をしたら、有理のやつ。

「私がミッキーにお金出してもらつて一人暮らしするから、早く離婚してよつてお願いしたの。」

悪びれる様子もなく、笑いながらそういつた。

「ほら、ママ私たちが落ち着いたら離婚するつて言つてたから。いつまでもくつついてるとさ、私からしてもヤなんだよね。ミッキーのママさん達もオヤジと早く縁をきつた方がいいって言つてるし。横隔膜の辺りに、真っ黒な、熱い何かがどぐろを巻いた気がした。俺だつて離婚してお袋がDVから解放されるのは大賛成だ。出来る限り手伝いをしたいと思っているし、引越しとかに入り用な金額ならある程度出したつていいと思っている。

でも、有理がそれを笑いながら言い放つのが、たまらなく腹立たしかつた。

後頭部の皮一枚下に、目から入つた光が当たつてフラッシュバックみたいに昔を思い出した。

この感覚は初めてで、それはつきりもう一度と思い出すことなんて出来ないと思っていたような、無かつたことになつてている昔の思い出だつた。

幼稚園か、小学生の低学年か。親父が俺に暴力をふるつていてのにお袋が怒り狂い、幼い俺と姉貴と、有理を三人引き取つて離婚しますと叫んでいる思い出だ。後にも先にも、天然のお袋が声を張り上げて激怒したのはこれしかない気がする。

感光してフィルム焼けしたみたいに、白くぼやけた光景だった。

それにはまだ続きがある。

俺と姉貴は、激怒するお袋にしがみついて泣き、震えながら離婚しないでつて頼み込んでいた。有理はそれこそ小さいから、よく意味がわからずにただ泣いていた。

俺たちだって有理と違いは無くて、よく意味もわかつてなかつた。ただ、リコンという言葉が不吉な何かで、自分の状況も把握しきれない子供の俺たちに降りかかっている現在の苦痛よりも、リコンが全部を持つていいてしまいそうな、もつと不吉で恐ろしい何かを持つてきそうな気がしたんだつた。

ただその本能的な恐怖だけで、お袋の足に必死にしがみついて泣き喚いた。

お袋は三人を抱きしめて、頭を撫でて、そして泣いた。

そうだ。それ以降、お袋からは離婚の話をしなくなつた。それこそ俺がある程度の歳になつてからは、癌だらけの俺に愚痴のようにこぼす事はあつても、俺たちが成人するまではと頑張つてきたんだ。

有理、お前は、それを、嗤うのか。

思い出が視界を支配して目の前が白く染まつた瞬間、とつさに手を出していた。

ぱん、なんて笑っていた有理の頬を張つていた。

「な、なにすんだよ！！」

咄嗟の事にしばらくあつけに取られてから、有理は立ち上がり猛然と蹴りかかってきた。聞き取れないような、呪いの様な罵詈雑言をひたすら投げつけてきながら。

「利用するだけ利用して、テメエがそれを言つんじゃねえ！！」

例えそれを覚えていなくたつて、お前はお袋の苦労を見てきているはずだろが。

有理はあつていう間に俺の胸元へもぐりこんで、駄々つ子のようこ殴り、蹴りかかってくる。よくもまあ、そんなに悪罵を吐けるもんだと冷たく思いながら、もう一度腕を振り上げ…熊木の静止の金切

り声で拳を緩めた。

「出でいけ。」

「言われなくても一度と来ねーよ！死ね！」

有理は転がっていた荷物をかき集めた。そして。

「すぐに手を出しやがって！オヤジそつくりなんだよーーー。」

吐き捨て、出て行つた。

「…………なんで、急に……」

熊木の震える声に「知るか。クソ……」と一人愚痴た。有理に蹴られた場所は痛くなかった。でも、あの叩き伏せられた冬を思い出すほどに、やたらと熱かった。

仕事についてから的一年は本当にあつという間だった。

また年が明けて一週間ほどしてから、去年のよつに祖父母に挨拶に向かい、少し落ち着くのはそれからだつた。

去年と比べて寒い冬だつたけど、それでも雪は降らなかつた。ただ雨なんかが降ると早朝に道路が凍結して、傾斜の急な坂の上にある物件に行くために車を降りて十分近く歩くとか、そんなのが多かつた。白い息を吐きながら、こんなにタイムラグがあると泥棒なんてとつに逃げちまうだろ、なんていつも思つた。これで雪が降つたら一体どうなることや。ひ。

そつこひじで一月も末の頃に、綺麗な封筒が一通届いた。

開くと、じにじばらしくて疎遠になつていた雄一からの招待状だつた。

同封されていた手紙には、雄一が目標にしていたプロダクションに合格したことと、卒業公演をやるからみんなで来てほしい、とあつた。

なんでも、実力が評価されて三人の主役の一つをもらえたとか。

「凄いね雄一さん。行くんでしょ？」

「ああ。休みとつておく。」

肩越しに覗き込んでいた熊木は歓声をあげた。養成学校とはいえミージカルのような劇を観るのは初めてだつて。俺だつてそつだつた。

公演は二月の第一週、土曜日だった。開演は十時。
理由はないけど……。池袋なんてすぐなんだから、出来るだけギリ
ギリに行ってやろうかと思っていた。

でも、六時に起き上がつた熊木が遠足にいく子供みたいにどたんばたん暴れまわる音がうるさすぎて、結局七時には起きる羽田になつた。

おちつけど、文句の一つも言おうかと思つたけど、弁当一式まで準備していつ出発するのか目を輝かせている熊木を見て、やめた。
俺が起きてやつと着替えが済んだ頃、やあやあとこれまたテンショ
ンの高い裕子さんが来た。もうすぐにでも出ようと、一人して騒ぎ
出した。つるさい事この上なくて、結局自分で立っていた時間
より一時間半ほど早く家を出る羽目になつちました。
一時間半ほど公演を、毎を挟み一度するらしい。

同じ公演を一度する理由は、劇に選出された二十五人のなかでもとりわけ実力がある数人を主役に回すためらしい。

幸音と出会い、幸音によつておおよそ無理矢理そのオーディションに付き合つようになれた二人の青年の話らしい。図書館司書を田指す順平と、図書館に良く通う少し変わつた喜一。

「うん、これは運命を感じるね。」

原島君は第一部の順平役だつてさー。第一部だとオーディションを受けた人、この役で、歌を歌うみたい。」
「こつちも楽しみだね。」

きや いきや いと 一人 ははしや い でいる。俺は、 と うと 素直に 祝福 し たいし、 作品を 楽しも う と 思つて いる 反面、 少し だけ 見に 行くの を 蹊踏う 気持 ち が あつた。

「でもさ、原嶋君お調子者なところあるから、喜一の方がはまり役じゃないって思つ。」

「ああ、それは少し。」

「……だから敢えて順平役にしたんだってさ、演出が。」

「へえー、じゃあ高く評価されてるんだね。」

「原嶋君凄いねー。」

「…そうだな。」

「元気ないけど、どうしたの治ちゃん？調子でも悪い？」

後部座席で裕子さんと騒いでいた熊木がひょこりと顔を出した。ビバーーとか、そういう動物をふと思いつ出すしげだ。

「なんでもない。」

「ん、そつか。」

一度俺に笑いかけ、ひょいと首を引っ込める。また裕子さんと熊木はわいわい騒ぎ出した。

そうこうするうちに目的地に着いた。雄一のところの養成学校で借り切つている会館はちょっとしたお祭りみたいになつていて。一回の広場ではいろんなものが売っていた。三人で話をして、一つ手ごろな花束を買った。

招待状を受付に見せると、一般客よりも少し早めに入ることが出来た。一般入場よりも三十分ほど余裕があるから、控え室の方へと足を向ける。

達筆な筆文字で、一文字五十センチくらいの、控え室、と掲げられた部屋の前には職員らしき人が立つていた。一直線に三十メートルほど続く控え室前廊下には、びつしりと花が届いていた。

「ちょっと花束小さくないか？」

「大きさはともかく、気持ち的には負けてないし。てか勝ってるし。」

けらけらと熊木は笑つた。イーロト言つた！なんて裕子さんも。

職員に話をしたら、案の定控え室には入れてくれないということらしい。二十五人の出演者全員の関係者が入つたら、公演前にパニッ

クになるからだ。

「じゃあ、この花束を原嶋雄一と、出演者のみんなに。」

職員と一、三の掛け合いをして戻ろうかとしたとき、タイミングよく共用トイレに出てきた雄一と、ばったり会った。自分で呼んどいて雄一のやつ、それこそ鳩が豆鉄砲食らったようなきょとん顔だった。

「なんだよ妙な顔して。」

「いや、治のことだからギリギリに来るんじゃないかつて思つてたんだ。」

「…そのつもりだったんだけど、熊木がな。」

苦笑いし首をかしげた俺を、そして熊木を見つめて、あははははと雄一は盛大に笑つた。

「熊木ちゃんはホントにいい口だな。偏屈な治にぴったりだと思つぜ。」

似つかわしくないことに上なく、気障にぱちぱちとワインクして笑つてみせる。熊木は小さく笑つた。

「きもいぞ。それに、そんなんじゃねーし。」

「全くお前は…」

雄一がトーンを落とした、そのタイミングで控え室から顔を出した演者の一人が雄一を呼ぶ声。ああ今行く、と返事を返して雄一は頭を搔いた。

「まあ、いいか。…とにかく、精一杯やるから楽しんでくれよ。」

「ああ、期待してる。」

直角に腕を曲げ、出征前の敬礼のようなしぐさをしてから、雄一は走つていった。

ステージが開放されると、熊木は一目散に走つていった。職員が鋭い視線でもつて走らないでください」と、もはや影も残さぬ熊木にじやなくて、取り残された俺と裕子さんに言つてきた。

観客席を探すと、熊木はど真ん中の最前線の席を三つキープして、してやつたり顔だった。探す俺たちに大きく手を振つてみせる。後ろからどんどん入つてくる他の客のことなんて意に介さずに、これでもかと大きく盛大に。

「とりあえず恥ずかしいからやめる。」

「まあまあ、さつちんも嬉しいんだよー。席取りでかしたさつちん！」

びしいなんて親指を立てる裕子さん。

「はい、でかしちゃいました。」

受けて敬礼する熊木。

ちょっと待つてくれ、すぐ後ろの席までぎりしりと観客がいるんだよ。最前線に立ちっぱなしで何をやつてるんだよ。

「……とりあえず、座りなつて一人とも。」

俺は隠れるように、椅子に横に座る勢いで、もたれかかった。一人は興奮冷めやらぬ様子で。でも、後ろからの視線をぐるりと見渡し小さくなつて座つた。

五分ほどして開演のベルが鳴つた。

まずはじめは全員そろつてのダンスと挨拶からだつた。専用のシユーズをはいているらしい。最前列だから尚更か、一人ひとりの歌声が、ダンススタッフの音が、固まりになつて体にぶつかつてくるような感覚。

ステージからもれるライトアップの熱もあって、どこか初々しさが見て取れたものの、首筋がぞくぞくするほど演技だつた。

簡単な流れはパンフレットにあつたとおり。第一場面が図書館。第二場面はオーディション会場。第三場面は空になつた会場跡。

幸音が歌オーディションのトリの順番で、実際に幸音の前の演者はそれぞれが自分で選んだ曲を披露した。順平たちは第一場面では観客という立場だ。

合間にオーディション側の不都合があつて鬼ディレクターが技術や

司会進行のコンビに檄を飛ばしたりする。

最後の幸音の歌う時になつて停電という一番のアクシデントに見舞われるものの、幸音は停電で使えないマイクではなくてアカペラで歌う、といふ話だ。

身内の顛願目、じゃ無いけど、やつぱり雄一の歌は参加者の中で一、二を争う程巧く聞こえたし：第二公演では順平の声は通つていたし、それに心がこもっている様に見えた。

俺は、無意識に、苦笑していた。

雄一は、いつだつて隣にいた。胸を張つていえる、信頼できる無二の友人だ。口にはとても出せないけど、あいつが言つたように、俺も雄一を親友だと思つてる。

出演者は舞台榮えする分厚い化粧をしているらしい。最前席から見ていると、やや伏せ顔に影がかかつたときに奇妙なほど表情が浮き上がつて見えた。

舞台役者には皆、ターンをするたびにきらりと軌跡を残すような、新鮮な華があった。伸ばして回転する腕がどこまでも伸びていって、舞台を撫ぜ回るよう見えた。

いうなれば、知つてゐる雄一との違和感と、羨望と、ちつぽけな嫉妬。

大団円の締めのダンス。雄一のシングルパート。

「この男の子は良い声を出すなあ。」

どこからか、そんな眩きが聞こえた気がした。

苦笑は自分の馬鹿さに、だ。

雄一は一直線に目標に向かつてゐる。それは昔からのこと。足下ばかり見て、立ち止まって、ちつぽけに必死に自分を守つうとしていた俺が真っ直ぐに雄一を見ることが出来たのは、その眩しさがあつたからだ。素直に雄一を尊敬して、応援したいと思つたからだ。

舞台の雄一は、生き生きしていた。

『あの、マイクを使わないで歌つていたときに、体に歌が入つてく

る気がしたの。』

舞台の幸音のセリフ。

幸音はオーディションに落ちてしまう。でも彼女は、悔しいと泣きながらも自分の成長を実感していた。

きっと、雄一も幸音と同じ感覚なんじやないだろうか。

きっと、雄一は今、楽しくて仕方ないに違いない、と思った。だって雄一の奴、役を演じているって言つよりも喜びを体現してるつて感じだつた。

舞台の上にずらりと、二十五人が列を作る。手を繋いで、曲の最後のリズムに合わせていっせいに礼をした。

嫉妬なんてお門違いだ。馬鹿だな。

隣の熊木が、ぽんと肩を叩いてきて…咄嗟に、立ち上がつてしまつた。

俺が雄一に並ぶのはここじゃない。ここで上を向く雄一に並ぶために俺がしなきやならないのは

拍手をした。それこそ掌から火花が出るんじやないかつてくらい且一杯の拍手を。

しなきやならるのは、心からの祝福と、その背中を押してやることだ。雄一が要らない心配をしないように俺が俺自身の場所で精一杯働くことだ。

一人一人と周囲の観客が立ち上がりしていくのがわかる。霧雨から一瞬でスコールとなつたスタンディングオベーションの中、最後に代表の演者の挨拶があり、幕がゆっくりとおりた。

観客席のライトアップ後すぐに三人で控え室に駆けていった。走らないでくださいっていう職員の言葉を後ろ髪に聞いて、三人で顔を見合わせて苦笑した。

雄一に、感謝と祝福と、これからプロダクションでの応援をしたかった。

いざたどり着いた控え室の前では、演者たちが講師を中心に輪になつて万歳三唱をしていた。それが終わると、女の子数人が感極まつ

て泣き出して、お互に抱き合っていた。

「……帰ろう。」

その鮮やかな感動を、俺たちが祝福の言葉で色褪せさせてしまつわ
けにはいかない。

今になつて思えば、彼らの様に眩しい涙が溢れるほど熱心に、中学
高校と過ごしてこなつたのが寂しく思えた。

「雄一には後でお礼を言えば良いや。邪魔するのは野暮だ。」

「そうだねー。」

「そだね。きっと打ち上げするだろ。」

二人も、少し残念そうに、そして俺と同じように眩しそうに目を細
めて雄一たちを見つめていた。

「美味しいものでも食べて、帰ろう。」

二人は一転、やつたーなんて万歳三唱した。周囲の冷たい忌諱の視
線を浴び、首をすくめて、びっくりするほど現金だなあと少し呆れ
た。

春になつて、お袋から、有理が熊木の後輩として看護学校に入学したことを見た。それをもつて離婚の話をつけ、正式な流れで、お袋が実家に帰るということになつたといつことで。

熊木はあれからも有理とはやり取りしてゐようで、俺がなんとも言えない顔をするのを知つていて尚、何とか仲直りをさせようと有理の話をしてきた。

正直、今になつてしまえばあのことについて腹を立ててゐるというほどでもない。

有理は、そういう奴なんだつてことはもう随分前からわかつてゐるつもりだった。

俺は、親父が泊り込み当務の一曰、前もつて休みを取つて車を飛ばして実家へ帰つた。

お袋が富山の実家に帰つてしまつとなると、あの日家から持ち出さなかつた私物を始末するなり、今のアパートに運び込まなきゃならない。

親父が建てた家、という意味での俺の実家に帰るのは、あの日追い出されて以来初めてだつた。

趣味で音楽をやつていたお袋のグランドピアノも、多くの荷物も、めぼしいものは大概運んでしまつたりまとめてしまつたりしたようだ。

二年前の記憶よりも生活感が無い実家は、酷く広かつた。

とりあえず、自分の私物を探しに一階の部屋へ向かう。壁に貼られたポスターも、机も、綺麗に掃除してあつた。

お袋がいつも掃除してくれていたらしい。本棚に残していつた小説も漫画も黄ばんでいない。陰干しまでしてくれていた。

結局荷物を見てみたら、コンポは有理が谷口の家に自分用に持つて行つちまつたとか、ベッドは持つて行つちまつたとか、それこそ本

棚と本と、少しばかりの服以外は私物なんて残つてない。もつとも、姉貴の私物もそつらしい。

お袋が申し訳なさそうに謝つてきた。筋が違つだらう。」
「とりあえずつめるものはすべて車に詰め込んだ。おんぼろの中古車はギッヂギッヂに腹いつぱいで、帰りにパンクするんじやないかつて少し不安なくらいだ。

最後に自分の部屋の窓を開け放つ。

吹き込む一陣の風。

今でも懐かしい、固まつていた空気が全部ベランダの向こうに押し出されていった。

春の風は、ザンゴクだと思う。

これで、この部屋はオレノヘヤじやなくなつた。

不必要、と判断した昔の教科書、細々とした小物を分別し、まとめて「ゴミ」にした。予想以上に時間を食つて、お袋の車に積んで「ゴミ」集積所に持つて行き、帰つてきたら日は沈みかけていた。

「お疲れ様。」

端が少し欠けた、昔からある焦げ茶色の急須でお袋は緑茶を入れてくれた。

「お袋も……お疲れ。」

お袋は茶葉にはこだわらない。というか玉露を買つたこともないかもしれない。何とかブレンンドとか、聞いたこと無い茶葉ばかり買つてくる。

一口、すすつた。

「……でも、なぜか毎回同じ味がする。」

これもお袋の味だな、なんて、凍り付いていたノスタルジアにかられた。おかしなもんだと思う。

「有理のこと叱つたんだつて？」

しんみりと空を眺めていた俺に、お袋は静かに囁いてきた。

「……。」

「熊木さんが止めてくれなかつたら殴られていた、つて文句を言つ

ていたわ。怒られた、って。」「…それは。」

「…わかつているわ。怒ったんじやなくって、叱ったんでしょう。…」

…原因は離婚のこと?」「

お袋は、ぼんやりしているけれど、それでもしつかりしているときはナイフのようにつ銃い。

「はい。」「

お袋は、静かに一口お茶をすすった。

「…見て、茶柱が立ったわ。」「

そして、ふふふ、なんてお袋は無邪気に笑った。

「有理は、治から見たらいい加減に見えるかもしないわね。言い回しも誤解を与えやすい。でも、いろいろ考えているのよ。それに最近は本当に頑張っているわ。勉強も、部活も頑張っていた。時々浅慮なことをしてしまうけれどね。」「はい。」「

「私がどうだ、なんてことは気にしないでいいの。……でも、富山に帰つてしまふのは、少し心配。昔から、治は頑固だからね。有理のことを許せない時もあるでしょう?それに、有理も頑固だから悪いと思つても自分からは謝らない。」「

お袋が言つたのは、まるで熊木が俺に言つたそのままのようだ。

「はい。」「

「有理はこれから一人暮らしするつてアパートを借りたの。バイトもするらしいけれど、足りない分は谷口君が出してくれるつて言つていたわ。谷口君がこつちに帰つてくる一年後まで、専門学校とバイトの一足の草鞋で、アパート一人暮らし。」「

確かに、私も向こう見ずだつて思つた。治の苦労を知つているだろう。なんてお袋はゆっくりと目を閉じた。

「治、有理のことを許してあげて。昔から、有理のことを厳しく見ているのは私も知つていたわ。でもね、私から見て、治はただ厳しくしているんじゃないってわかつてているから。有理が我を通したら

叱つてあげて、それから許してあげて頂戴。お願ひよ。」

「わかつた。有理のことは出来る限り許せるように努力する。」

「よかつた。」

少し力が入つていたのか、ほうと一息つくのと同時に、お袋の肩が下りた。

お袋は小さくなつた。正月に会つていたけれど、いつしてゆつくり話をして痛感した。

「一年は恐ろしく、長い。すべてが変化していくのは充分すぎるほどだ。」

「…………お袋。」

「なあに？」

「その…………」の間、昔のことを思い出したんだ。少し。」

お袋は急須に残つていたお茶を、俺と自分の茶碗に注いだ。そしてゆつくりとこづちを見返し、頷く。

「すげえ小さい頃にひ、離婚するつて言つたお袋に、俺と姉貴で泣いて縋つて、離婚しないでくれつて泣いただろ？」

「そんなことも、あつたわね。」

思い出したのか、お袋は、すいと皿を細めた。

「俺さ、まだ迷惑も、心配もかけるかもしれないけど。……しつかり働いてるから。こいつだつたか、適当に生きとお袋より後に死ぬとか言つて悲しませちまつたけど、俺は今、生きていたいって言えるくらい幸せだつて思えるから。」

お袋が手に持つていた茶碗の水面が、幽かに揺れているのが見えた。「だから少しだけ、安心してくれていいからさ。これからは俺たちのためじゃなくて自分のために生きてくれよ。」

「はい……ありがとう、治。」

ゆつくりと、更に一口お茶をすする。そして一つ頷いた。

「そうね、あと一つの心配事といえば、熊木さんとのことかしら。有理が言つには仲良くやつているんでしょう~。」

心配だわ。結婚はいつになるのかしら。呼んでくれるのかしら。お

袋は小さく微笑んだ。

「あいつはそういうのとは違つて……」

「治。」

今度は静かに、叱り付ける口調だった。

「そういうのとは違つて、遊びだとでもこいつの？ 今でも、本当にそうこいつもりはまったくないの？」

「いや……俺は……」

お袋は、そんな俺を辛そうに見つめて、それから無理矢理笑つて見せた。

「結婚は辛い事も多いけれど、幸せなことも沢山あるわ。私も、裕美と、あなたと、有理を産めた事を心底嬉しく思うわ。あなたたちが立派になつてくれて、とても幸せ。」

私が言うと、いまいち信じられないかしら？

冗談めかして、お袋は付け足した。

「そんなはず、無いだろ。」

「付き合つのも怖いって思うのは、の人みたいになつて熊木さんを傷つけてしまうのが怖いからでしょう？ 大丈夫。その、熊木さんを大事にしたい心があれば、きつとうまくいくわ。」

お袋は微笑んだ。ああ、この人には一生敵わないんだろうなあと、思う。

「でもね、そろそろちゃんとしてあげないと、熊木さんが可哀相だわ。きっと不安よ、彼女。」

「…………まあ、適当にやるから、お袋はわざわざやるんとは気にしないでいいつて。」

「そう、ふふふ、じゃあ、好い加減にしておきなさいね。」

「大きなお世話だ。」

ふふふ、なんて、お袋は本当に楽しそうに最後に笑つた。

軽く夕食を「」馳走になり、家に帰る。

大荷物を担ぎ上げ、玄関の鍵を開けると、やけに家は騒がしかつた。

「ただいま。熊木、どうかしたのか？」

「う、ううん、なんでもないの。」

ばたばたと居間から駆け出してきた熊木は、大げさすぎるアクションで、わあ大荷物ね。と驚いて見せるなり玄関に駆けつけた。

荷物を降ろして、真っ直ぐに熊木のことを見つめると、熊木は露骨に視線を泳がせてみせる。

「……隠すなら、まず靴をどうにかしろよな。」

「んあつ！」

俺の言葉で熊木はびくりと体を震わせた。玄関には俺と熊木の靴以外に、二人分の靴がそろえてあつた。

「有理と谷口君か。」

「あのほら、私がピザ食べたいなーってなつて、でも一人で女の子がピザ頼むの恥ずかしいし……。だから、」

「別に言い訳しなくていいって。」

荷物を全部玄関先に運び込んで首を曲げると、「きりきりなんて盛大な音がした。運動不足のつもりは無いんだけどな、なんて思う。玄関付近を俺が占領しているもんだから、有理たちは仕方なく居間で大人しくしているらしかつた。

「悪いな、熊木。余計な心配させて。」

少し拳動不審気味の熊木の肩をぽんと叩いた。

「ううん。」

少し話をしたいと思っていたから、ちよつと良かつた。

「え？」

不安げに柳眉をゆがめる熊木をそのままに。廊下をまっすぐに歩いて、居間の引き戸を開いた。同時にタシーンなんて勢い良く、居間

から続^つきの寝室の襖が閉じる。居間はもぬけの空だつた。

「谷口君、いるんだつたらちよつといいか？」

有理が俺の話を聞かないのは大体予想がついていた。

「眞面目な話をしたい。有理は聞きたくないだろうから、一人だけで。」

襖の向こうでは、有理と谷口がなにやら話をしているらしく。『じよごしよと襖越しに声が漏れ聞こえてくる。

間。そして、すらりと襖が開いた。

一人で出てきた谷口は緊張した面持ちで会釈を一つ。俺が示した正面に、座つた。

「熊木、少しだけ席をはずしてくれるか。有理を連れて。」

後ろの引き戸から、不安げにこっちを見つめる熊木を手に取るようになわかつた。きっと、巨人の星の飛雄馬の姉みたいに。俺の頼みを聞いて、少しだけ戸惑つているような気配がして。

「大丈夫。たぶん、取つて食つたりはしない。」

振り向かずに肩をすくめた。後ろで小さい吐息の音が聞こえる。

「わかつた。」

衣擦れと足音が遠ざかっていく。玄関のドアが閉まつたのもわかつた。

「悪いな、谷口君一人居残りさせて。」

「い、いえ。」

ぶるぶると、谷口は大きく首を振つて見せた。有理が隣にいるときはもつと、こう、無機質なイメージがあつた。でも今は動搖が手に取るようわかる。

「別に固くなんなくていいからさ。たしか谷口君は有理と、親父に挨拶に行つたんだよな？」

「はい。去年の夏ごろに……一度……挨拶に行きました。」

「そつか。」

こつちの質問の意図がはかりかねないせいが、彼の返答は歯切れが

悪い。

「たぶん、親父は酔っ払って何も言わなかつただらうし……そもそも何も言わないから、俺がと思って、な。」

たっぷり一呼吸。何だかんだ言って、俺も相当緊張しているらしい。手のひらに汗をかいているのがわかる。顔に出ないのはせめてもの救いか。

「俺は正直、有理のことをあまり好きじやない。」

一瞬だけ、谷口の視線が鋭くなつたのが、良く見えた。

「有理は昔から、誰かにうまく頼りながら楽そうな選択ばっかりするやつだった。最近だと柔道部の関係者が看護へ誘つてくれたっていうのに、誘いを蹴つた。学校に受かつて通うのも、谷口君が帰つてくるまでは実家で良いだろうに一人暮らしを始める。」

「お兄さん、それは……」

お兄さん、か。

「そんな、俺を取つて食いそうな眼をすんなつて。もう少しだけ、聞いてくれ。」

手をひらつかせ、場の空氣を何とかしようとしてみたが、谷口はだいぶ熱くなりかけているようだつた。

「俺から見たら、それもこれも逆に大変な進路ばっかり取つているようと思えてならないんだ。太い縁も濃いゆかりも無い人が、進路の手助けをしてくれるつていうなら、これからの人付き合いの幅が広がつて良かつただろうし、未成年の有理が成人するまでの二年間をバイトと学校にと駆けずり回り、しかも一人暮らしするなら、窮屈でもあの親父に世話になつてはうがいいだろうとか。」

親父は金銭的な意味でも、有理には協力を惜しまないんだから。そこまで言つたとき、ついに堪えられなくなつたのか谷口は身を乗り出して口を開いた。

「聞いてください。有理がそつちに行かなかつたのは俺のお袋が看護師で病院側から学費を援助できるからで、一人暮らしをするお金も、足りない分は俺が出せるからです。有理はそういうこともちや

んと考へて……

「だから、だ。」

「……え？」

これから言おうとしていることを、頭の中で一気に洗い直し、組み立てる。

「俺は口下手だから、うまく解釈してくれ。」

なんて前置きをした。

「今、有理は金銭面でも精神面でも、谷口君を頼つてゐる。それ自体は悪いことじやないとと思つ。ただ有理はその意味に気付いてない。人に投げかける言葉じやないよつた。組み立てたこの言葉は、そのまま自分への説教のようだ、なんて思う。

「あいつは結局、いろいろな方向から自分を支えてくれる糸を全部断ち切つて、一本だけに縋つてゐるんだ。」

とやかく言つても、俺が今まで気付かなかつただけで、俺と熊木の関係も全く同じだ、と思つ。

「有理はたまに視野が狭くなる。それにわがままだ。これから付き合つて行こうとするともつと我を通すかもしれない。谷口君はそれを飲み込めるつもりなのか? もつ、金銭面も精神面も責任を取れるのか?」

「取れます。自衛隊から帰つてきたら、結婚を考へています。」

少しの間も開けず、谷口はそう返してきた。いつの間にか、その目に燈つていた険はなくなつていた。

それは、見返すこつちがやるせなくなるほど愚直に、真撃に見えて、思わずこつちの口元が緩んだ。

「そうか。親父の代わりといつたらオカシイけど……。」

座布団の上で正座をしなおした。背筋を伸ばして、改めて谷口を見返す。

「有理のことを、宜しく頼む。」

深く、頭を下げた。

「はい。全力で護ります。」

谷口も、正座しなおしてぺこりと頭を下げた。

今でも有理のことは、嫌いだ。そのスタンスにはいつも苛立たされる。でも、有理はいつだって、どこかほつとけない妹だった。

いい加減で、なんだか投げやりで、浅慮で。勉強も十段階評価で三とか、四ばかりでも気にも留めなかつた有理。

でも今、看護師になる目標に向けて努力し、そして看護学校に受かったつていう事実は確かにものだから。

そこまで頑張れる夢を持った有理を。有理を支え、変えた谷口のことを、一度心底信じてやりたくなつた。

「……どつかの洒落た偉人が言つてたな。結婚は宝くじみたいなもんだつて。」

この空気がむず痒くて、思わず軽口を叩いた。

「……夢と希望が詰まつているつて話ですか？」

「『』く稀には、当たりがあるつて話。」

三秒ほど沈黙。それから谷口は笑い出した。

「今それを言つのは反則ですって。」

「二人のは、きっと当たりだろ？」

「はい。」

自分で言つておいて苦手な空気を作つちまつたと、手持ち無沙汰で冷め切つた残りのピザを口に運んだ。

……冷めたピザは人間の食べ物じゃない。

その顔を見て、温め直してみんなで食べましょと谷口は有理に電話をかけた。

谷口から何か聞いたのか、最後に有理は「余計なお世話だバカアーキ。」なんて言つて帰つていつた。

ひとしきり後片付けを済ませて、薬缶を火にかける。引き戸の向こうでは映画、アメリカが流れている。熊木が食い入るように映画を観ている。

閉じた引き戸越しに、ヴァイオリンの音楽と、語り手の飄々としたナレーションが聞こえてくる。

会所の隅においてある椅子に腰掛け、目を瞑つた。

モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～最終話

ゆっくりと、今残っているすべての思い出を引き出した。

そしてさつきの、自分への説教を反芻する。

人間の根っこは善から来るのか。悪から来るのか。そんなこと知らない。

少なくとも昔から、俺の根幹を作っていたのは憎しみと意地だった。思い出せない過去という脆い足場に恐怖し、他人を羨望し、必要以上に挫折し、しまいには妄執に駆られ、すべてを嫌悪し、自分に憎悪を抱き、悲壯に塗れて逃げたくて。でも、意地を張っていた。確かに、俺にはそれつきりだったと思つ。

ゆっくりと、思考を回す。

思い出のスタートは大半が中学からだ。それは今でも変わらない。でもそれから数年間のことはすべて鮮明に覚えている。

あの膣を噛む思いの日々。

自分の情けなさ。

一人暮らしへの期待と不安。

親友の言葉。

自分の不甲斐無さ。

真珠の涙。

人生の師の励まし。

熊木との出会い。

やりがいのある仕事。

家族への想い。

一人きりだと想い込んでいた俺の回りでも、一本ずつ糸は伸びて、周囲と結びついていた。

今は信頼できる親友がいると、胸を張れる。

仕事に目標を掲げることが出来る。

それに…

タイミング悪く、ピイピイと薬缶がわめき散らした。

「わかつたわかつた。」

火を止めて、紅茶を入れる。引き戸を開いて居間にに入るなり。

「遅いよー。出会いのシーン終わっちゃったし。」

薬缶より騒がしく、ぶつぶつと熊木はわめき散らした。

「悪かつた悪かつた。」

紅茶をならべて熊木の隣、指定席の猫の刺繡入り座布団に腰を下ろした。

熊木は熱心にアメリを見ている。

その横顔を見て、胸にじわりと湧く想いが確かにある。

「ん? どうかしたの?」

熊木は俺の視線に気付いて、子猫みたいに目を丸くした。

「なあ、熊木の実家つてどこなんだ?」

「……え? なんで…… そんなこと急に?」

満月のようだつた目が、不安そうに垂れ下がる。

「こつまでもこのまま帰らないって訳にいかないだろ。よかつたら

…

俺の言葉が終わりきるよりも先に、熊木の見開かれた瞳にどろりとした昏い色が満ち、それと同時に俺の肩辺りを、熊木の拳が打つた。

「う…」

「なんで…」

ぱしん、と一度、びしり、と三度。

「お、おい、熊木。」

「なんで今になつてそんなこと言つの?..

ばしり、と五度、ずん、と七度。

「ちよつと待てって。」

「じゃあなんで今まで玄関を閉めなかつたの…?」

熊木はもう数え切れないほどめちゃくちゃに腕を振り回す。予想外なことに、それは有理の蹴りよりも重たかった。

「それならなんで…私が帰つてこれるよつて鍵を開けていたのよ…！」

握っていた拳がするりと解ける。そして熊木は顔を覆つて小さく丸まり、泣き崩れた。

「話を最後まで聞けつて、熊木…」

肩に置いた手が、横薙ぎに払われた。更にトーンを上げて、うううう、と熊木は体を真珠貝のようにこわばらせる。

言葉選びを間違つたな。畜生。昔から口下手なんだよ。

「偉音、たのむから話を聞いてくれ。」

嗚咽が止まつた。偉音は手で半分以上隠しながら、涙でぼろぼろの顔を幽かに上げる。その真つ赤な眼は、光の一切燈つていらない黒目は、警戒しながら様子を伺う猫科の動物のよつだつた。

初めて出会つた夜のことを、思い出した。一人とも眼を真つ赤にしていた公園の夜を。

どんな表情になつてゐるかわからない。でも、今夜の俺は努めて優しく微笑んでみせた。

「偉音、よかつたら俺とちゃんと付き合つて欲しい。」

ゆつくりと手を伸ばした。顔を頑なに護つていた偉音の手をどけ、その頬に触れる。

「偉音のご両親に挨拶しに、実家に一緒に帰ろつ。」

一番初めはおかしな奴だと思つた。そして俺とよく似てゐると。だから、助けたいと思つた。

一緒に暮らすうちに、いつの間にか吸つては吐く、無色透明な空気のようにさり気無く、無くてはならない女性になつてゐた。偏屈で凝り固まり尖つた、不恰好の刀を包む鞘のよつに。

緊張しきりで、口元が引き攣つてゐるのが自分でわかる。掌から伝わつてくる柔らかい感触と温かさが、一秒ごとに俺から冷静さを奪い取つていく。

「う、ううううう…」

偉音の搾り出すよつな泣き声と共に、ぼろりと一際大きな滴が流れ

た。

「俺じや駄田か？ 倖音……？」

満月のよみづな涙をぽろぼろと零しながら、幸音は小さく首を振った。

「するじよ治ちやん…… そんな顔して。」

すい、と顔が近付く。

私のほうが、ずっとずっと待っていたんだから。

吐息の声が終わると同時に、柔らかい唇が重なった。

頭の芯がゆるゆると溶けていく気がする中で一つ。

ああ、甘い涙というのも、あるんだなあと、思った。

終幕

モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～最終話（後書き）

最後まで付き合っていただき、誠にありがとうございました。

空想の物語。

これを、夢物語だと、今尚苦しんでいる人がどこかにいるかもしない。

そう、これは盤の空想の物語。

でもきっと、治たちは生きていた。

もし、あなたが、自分に負けそつだつたなら。

もし、あなたが、治のようにすべてを諦めそつだつたなら。

『負けないで欲しい』

その一念で、書いたのです。

未熟で、拙いけれど。

これは、そんな貴方達への応援歌のつもりです。

がんばれ。

みんながんばれ。

改めて、最後までお付き合いでいただき、本当にありがとうございました。
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5601c/>

モノローグ～優しい憎悪、甘い涙～

2010年10月14日17時23分発行